

山びこ通信

2月号 2010.2.25

「クラス紹介」

「考えること、学ぶこと」

文・山下太郎

『論語』に「学びて思わざれば即ち^{くら}罔し。思いて学ばざれば即ち^{あやう}殆し」という言葉があります。知識を丁寧に学ぶことも、それを用いて自分の思索の世界を深めることも、ともに大切です。知識の習得は、スポーツの練習同様「繰り返し」取り組むことで「できる」ことが増え、自信がわいてきます。暗記や暗唱、徹底した問題演習はしんどいことのようにですが、コツがわかると「楽しい」ことに変わります。

一方、「考える」力はどうすれば身につくのでしょうか。この問いに簡単に答えることは出来ませんが、知識が増えると考える力も増していく、とは限らない点が興味深く思われます。現京大総長によれば、「今の学生は伸びきったゴム」なのだそうです（『文藝春秋』2010年2月号）。個々に反論の余地はあると思いますが、教授陣の目から見て、今の学生は総体に考える力が脆弱であるとみなされていることは憂慮すべきことです。

ゴムが「考える力」や「好奇心」を意味するとして、その弾力を強化するには必ずしも暗記や問題演習が有効とは限りません。むしろ阻害する可能性も考慮すべきです。知識や解法を暗記すると一時的に点数が伸びます。点数が伸びることは素晴らしいことですが、それだけを目的にすると、得点に結びつかない取り組みの一切を「無駄なもの」として遠ざける傾向が出てきます。その結果好奇心が弱まり、考える力もねばりを失います。

好奇心を守るにはあえて「無駄なもの」に目を向ける必要があります。とりわけ「遊び」と「読書」に注目したいと思います。数値にして比較できませんが、子どもたちの「遊び」や「読書」の体験は、年々減少傾向にあるのではないのでしょうか。

一見「学び」に直結しない「遊び」の体験は感受性や知的好奇心を刺激します。「山の学校」の小学生の取り組みは、科目を問わず「遊び」の要素がふんだんに盛り込まれていますが、その狙いの一つは、考える力の基礎（論理的思考力等）を育てることにあります。

一方、「読書」についても、感受性と思考力を磨く上でこの上なく有効です。ただし、気晴らしに読むのではなく、問題意識を高めるには、読み書きの正確な訓練が不可欠です（今の日本の教育ではこの訓練が致命的に欠如しています）。「山の学校」の中学・高校生の「ことば」のクラスを例にとると、一冊の本を最初から最後まで読み切ります（古典と呼ばれる作品やプラトンやアリストテレスの哲学書も含まれます）。内容を正確に理解するため、本の内容についてクラスで意見を交わし、各自で論点を見つけた後は、自分の考えを文章にまとめます。講師がそれを丁寧に添削するのは言うまでもありません。

時代がどのように変化しても「本当に大切なもの」は変わりません。人が生涯にわたり自ら学び、自ら考えるために、私たちはこれからも「考えること、学ぶこと」の基本を見つめ続けたいと思います。

（山の学校代表 山下太郎）

「山の学校に通って」

五年生 小國真幸

ぼくは、一年生から山の学校に通っています。今は、『かず』と『ことば』と『絵画』を習っています。今回は、『ことば』の事を書きます。五年生になって『オズの魔法使い』の本をみんなで読みました。そしてその後に、原稿用紙に書き写しました。夏休みに『冒険の本』という題で自分の本を作りました。原稿を書いているときぼくは、ワクワクしてお話がどんどん書けました。先生は、全部書けた事が素晴らしいとほめてくれました。ぼくは、とってもうれしかったです。

二週間に一回秘密道具を考える時間があります。秘密道具とは、ドラえもんがポケットから出している道具を自分たちで作れないかと考えてみることです。ぼくは、『空中新幹線』『家取替えセットつみきばん』『どこでも使えるカギ』などを考えました。説明は、絵と言葉で説明します。この授業はとっても面白くてすぐに時間がたってしまい、帰る時間がおそくなった事もありました。

『熟字訓と当て字』という授業があります。この授業は、先生が書かれた熟語の読み方(熟字訓)を意味もあわせて考える授業で、ふだんあまり使わない漢字が覚えられるので楽しいです。

今、『ガリバー旅行記』の書き写しをしています。

ぼくは、山の学校に通って、学校では、教えてもらえないような事を沢山教えてもらって本当によかったですと思っています。

「ぼくにとっての山の学校」

五年生 石川博利

ぼくが山の学校に入ったきっかけは、弟と妹が入ることになり、ぼくもやって見ようと思ったからです。ぼくは今一人なので、つきっきりで見てもらっています。学校でよくわからなくてこまっていることも、山の学校ではよく理解ができて、苦手なこともとくいになりました。とてもうれしかったです。いつも一時間がすごく短く感じます。そして、木曜日は山の学校があるのですごく楽しみにまち、木曜日になるとすごくハッピーな気持ちになります。とくに亮馬先生と二人の時は毎日いろいろなことを学びます。分からないところは分かるまで教えてくれたり、いろいろなお話ができてたのしくて、亮馬先生を目標としてお家でもドリルなどをがんばっています。

今はかずのクラスの残りの時間で、ひねもすをしています。ぼくはへたくそだからできないところはやってもらったりしています。前には戦車をつくり、今では船を作っています。

かずのお勉強が終わり、かいだんをおりてくるとき、ぼくか、亮馬先生がなにかをしゃべりながらおりてきます。ぼくの場合だとたいい動物のことです。亮馬先生だと、ぼくが

「〇〇ってどういうこと？」

ときいたことに、すぐこたえてくれます。おりてきたらお母さんがまっていて、そこでもすこしお話をしてから、

「さようなら。ありがとうございました」

といいます。

車に乗り、お母さんに一番初めに言うことは、

「あ～、たのしかった」

です。それで今日したことをいろいろ話して、今日はここがとくにたのしかったなどと山の学校のことをいいます。家につくと今日やったプリントや物を見せながら、これはこういうことなどと説明します。

このようにぼくを楽しませてくれる楽しい習い事です。

「ギリシア語のすすめ」

石田良一

昨年九月からギリシア語講読を受講して、ホメーロスを読んでみます。広川先生には以前大学でギリシア語入門を教はったことがあつて、その時の明快な講義には感心しました。この授業でも、一語一語のニュアンスを丁寧に説明して頂いてをります。ギリシア語は「小辞」といふのが難物ですが、これが分つてくるともつと面白くなると思つて努力してみます。又朗読の仕方は本を読んでも中々分らないのでこの授業に参加したといふこともあつて、特に注力してをりますが、歳をとつて頭が固くなつてゐる所為か、中々進歩しません。

ところで私が六十才を過ぎてから古典ギリシア語を学び始めたのは、何よりも古代ギリシアが好きだからです。古代ギリシア文化の魅力は、一部門に偏らないその総合性・統一性にあります。彼らの遺したものは、政治制度としての民主政や「自由」の意識から始つて、神話・美術（彫刻・建築・陶器）悲劇・喜劇・叙事詩・抒情詩・歴史・哲学・論理学・弁論・政治学・数学・天文学・動植物学・医学等々、極めて多方面に亘り、しかも世界的水準からみても、いづれも独創的で超一流であることです。このことから、ギリシア文化は「モデル」「範例」としての意義をもち、これと比較することで現代なり日本なりが一層よく分る、といふことがあります。

ギリシア文化は決して骨董品ではありません。現代でもなほ生きてゐて、切れれば血が出るやうな現代性をもつてゐます。ギリシア・ラテンの西洋古典は、我々日本人の教育・教養には殆ど採入れられてをりませんが、これは非常に惜しいといふか、むしろ欠陥だと思ひます。ギリシア語はそれだけ時間をかけて学ぶに十分価するものです。

是非ギリシア語を、そしてギリシア文化と一緒に学ぼうではありませんか。

「ラテン語受講感想」

小林哲也

山下大吾先生のラテン語入門講座を受講しました。受講して、西洋に関係することを学ぶ者であれば、ラテン語はかじるだけでも絶対にかじったほうがよい、と強く思いました。普段はドイツ語を読む機会が多いのですが、ラテン語もしばしば引用の形などででてくることがあり、今まではほぼ敬遠状態とばしながら読んでおりました。しかし、一通り文法を学ぶと、格変化を確認しつつ辞書は引いてみようといった段階にまでは、確実にステップアップしました。レベルの低い話で申し訳ないのですが、それまで勝手に敷居が高いものと思つて遠ざけていたものに親近感がわくようになるというのは、それだけで大きな変化ではあります。

ラテン語を学ぶことで、例えばドイツ語など他の言語を相対的に見る視点が生じるというのも学ぶメリットとしてあるかと思ひます。例えば、ちょうどドイツ語では曖昧な形で「3格」としてあるものが、ラテン語では「与格」と「奪格」に分かれていたりして比較して興味深く思つておりました。また、ドイツ語も英語などに比べると格がしっかりしていますが、ラテン語はもっとかつちりしているので、主語なしでオーケーなどというのも面白いと思ひました。いずれにせよラテン語学習によって既習言語への視野が広がる感覚がありました。

それとこれは私が勝手に面白いと思つている「発見」なのですが、英語の「republic 共和国」がラテン語「res publica 直訳すると人々のもの」になるときに語末が脱落しての変化であつたということです。今まで勝手に re は「再」という意味で、何故「再び公」が共和国なのか分からなかったのですが、ラテン語由来と知つて納得しました。私の挙げた例はつまらないかもしれませんが、学んでみるとそのつど何かしら発見があるのではないかと思ひます。

山下先生がラテン語のみならずチェコ語やロシア語などスラヴ系の言語をマスターしておられ、英語その他の西欧諸言語にも堪能でいらっしゃるため、こぼればなしが非常に豊かになるのも有り難かったです。毎回予習は大変でしたが、山下先生が毎回それ以上に頑張つてくださっていることに励まされて、三ヶ月という短期間で一通り文法をやり終えることができました。

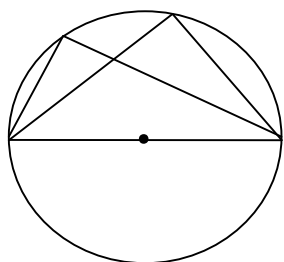
迷つておられる方は是非受講されることをおすすめいたします。

『ユークリッド幾何』 対象：中学生以上 講師：福西亮馬

山の学校の小学生高学年クラスでは今、『論理パズル』をしています。このクラスですることはその発展です。一問一問、教科書に書いてあることを鵜呑みにするのではなく、『自らの問題』として課すことで、それに取り組むねばり強さと、論理的思考力を鍛えます。

たとえば以下のような問題は、シンプルでありながらひとたび解けた時の喜びは美しいとさえ感じるものがあります。昔解いたという方も、ぜひ今一度お考えになってみて下さい。

命題「直径を弦とする円周角は、すべて 90° である。」(タレスの定理)



ギリシアの哲学者にして数学者・工学者であったアルキメデスに、「私の円を乱すな」という言葉があります。踏み込んできたローマ兵士によって殺された時、彼が最期にそう言ったとされています。今ではもう、彼を殺した兵士の名前は残っていませんが、彼の描いた円による仕事は、なおも生きています。それはおそらく、人に言われてした行為だからではなく、彼のたましいが成しとげた「自由人の仕事」だったからなのでしょう。

アルキメデスやタレス、そしてユークリッドが考えたのと同じ、純粹思考による楽しみを、現代の参加者のみなさんと一緒に味わってみませんか。

『ロボット工作』 対象：中学生以上 講師：福西亮馬

NHK の主催で有名な、『ロボットコンテスト』(略してロボコン) というものがあります。与えられた規格内でロボットを自作して、それをコントロールし、目的とする事柄をよりよく達成する、という意欲的な取り組みです。実は私自身それに憧れて、工学部に入ったようなものでした。そして大学時代は制御理論を専攻し、まさにその分野で勉強してきたわけですが、肝心のロボットは一台も作らないまま、今に至っています。「自由は、自分で作らなければ、無い」ということを知らなかったばかりに、貴重な青春時代を無為に過ごしたと悔しい思いをしています。

けれども今、私は山の学校で講師をしていて日々感じることもあります。それは、学生時代よりもむしろ「自由がある」ということです。また私と同期で、今は京都工芸繊維大学の助教をしている人と今でも時おり話をする機会があるのですが、決まって彼が口にするのは研究室の学生のことで、研究室に配属された学生たちが、自分からアクションを起こそうとしないことに疑問を感じていて、「一人でいい。ロボコン出身の超優秀な人が研究室に来てほしい!」と切実に願っているそうです(笑)。



(市販の『ミュウロボ』基本セット。パソコンから入れたプログラムを回路に記憶させて動かすことができます)

しかしそれは実際のところ笑い事ではなく、それを聞いて当時の私自身の知的怠惰を省みるような思いがしました。そして彼のように魂のある研究者を、ぜひとも失望させない学生を山の学校からは輩出したい! と思い立ち、このクラスを立ち上げることにしました。

ロボコンに出ることはまだ夢の夢ですが、「隗より始めよ」ということわざもあるように、まずは『ひねもす』で作ったロボットをモーターで動かしてるところから始めたいと思います。そしてゆくゆくは、市販のロボット工作の教材を援用して、プログラム制御で動かすことをできればと考えています。

我こそは「同志」と思う人は、ぜひとも山の学校に集まってください。

『確率・統計の考え方』

対象：中学生以上

講師：浅野直樹

私は小さいころから確率的な考えに興味がありました。自分なりにいろいろと考えてきたことが、中学や高校の数学で習った道具立てを使うとすっきりと説明できることに感銘を受けました。また、組み合わせや確率を考える際の発想の転換も面白く感じました。例えば次のような問題です。

【問題】

1 から 5 までの番号のついた球がそれぞれ 1 つずつあり、これら 5 つの球を A, B, C の 3 つの箱に入れるとき（各箱には 5 つまで球を入れることができ、空の箱があってもよい）、球の入れ方は全部で何通りあるか。

A に 5 つの球が入る場合は 1 通り、A に 4 つの球、B に 1 つの球が入る場合は 5 通り…と場合分けをして計算しようとするは大変です。ここは発想を転換して、5 つの球に入るべき箱を割り振ると簡単です。つまり、1 番の球が入るべき箱は A, B, C の 3 通り、2 番～5 番の球も同様に 3 通りなので、求める総数は $3^5 = 243$ 通りとなります。

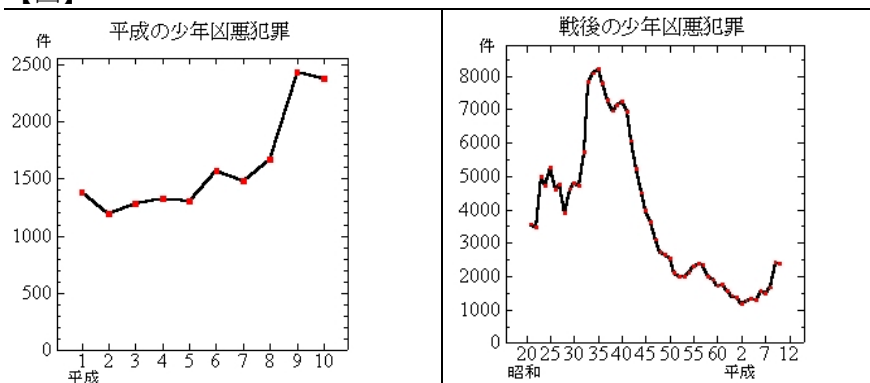
大学では社会学や心理学を主に学んでいたのですが、それらの領域でも確率の思考を生かすことができました。統計です。ある授業では「イチローの真の打率はいくらか？」という問いを統計的に解く機会がありました。具体的な計算はここでは措くとして、「真の」とはどういう意味なのでしょう。統計学では 95%あるいは 99%の信頼度でもって「真である」とみなします。

統計はうまく活用できれば有力な切り口となります。しかし先ほども述べたように、あくまでも 95%と いった蓋然性に過ぎません。また、統計はしばしば意図的に人を欺くように用いられます（次ページの図を参照）。そうではなかったとしても、とても意味があるとは思えないような連関が得意げに示されたりします。しかも統計では「相関関係」を示すことができるだけで「因果関係」を示すことはできません。そして最も基本的なこととして、統計だけでは価値を問うことができません。現状がどうであるかという分析はできて、いかに行動すべきであるかという問いには答えられないのです。

というわけで価値を問うなら倫理学や哲学の領域ですが、「賭け」を論じた哲学者としてはパスカルが有名です。彼は確率論の創始者の一人だとされています。新しいところではゲーム理論の囚人のジレンマなどをどのように解くかという問題があります。これは実社会での経済的な問題に通じています。

確率・統計では騙されずに正しく考えるために自分の頭で考えることが重要です。ましてや価値を問おうとするなら唯一の正解があるわけではないのでなおさらです。思考法の訓練を共にすることができればと思います。

【図】



左のグラフだけを見ると近年少年凶悪犯罪は増加しているように見え、それをもとに「近頃の若者は…」と言われたりする。しかし右のグラフのように長い期間で見るとむしろ昭和 30 年代のほうが少年凶悪犯罪が多かったことがわかる。もちろん、正確に考えるなら少年全体の人口数や、警察の方針が一定であるかといったことを考慮しなければならない。

<参考サイト>

http :
//mazzan.at.infoseek.co.jp/lesson2.html

おまけ : センター試験の数学ⅡB の第 5 問「統計とコンピュータ」を選択することができるようになります。ベクトルや数列と比べて短時間でかつ簡単に解けるのではっきり言っておすすめです。

『文献調査入門』 対象：中学生以上 講師：浅野直樹

大学に入って人文科学に関わるようになると文献を読んでレポートや論文をまとめるということが主な活動となります。しかし日本ではそのための教育が全くといってよいほどなされていません。そのため、大学でレポート試験を課すとインターネットから丸写しする生徒がかなりいると聞きます。おそらく彼らはそれしか方法を知らないのでしょう。中高生のうちに文献調査の基礎を身につけておくことは重要です。

ここでその概要を示しておきます。何を論じるにせよ、過去に同じようなことを論じた人がいるはずです。まずは百科事典や各種の辞書類から始めると大きな見取り図を描くことができます。次に関連する本や論文を探します。ちょっとしたテクニックを身につければ網羅的に探せますし、公立図書館などを使えば意外に多くの文献を手に入れます。そしてそれをまとめる際にも一般的なルールがいくつかあります。無事にまとめ上げることができれば発表したくなります。商業誌などで投稿を募集しているかもしれません。少なくとも知人に配布したり、インターネット上で公開したりすることはできます。仲間と雑誌を作ることも可能です。

ためになるということ以前に、自分の興味がある事柄を集中的に調べてまとめることは楽しい作業です。例えば自分の好きな料理について歴史、レシピ、逸話、化学変化などの観点から徹底的に調べるのもよいでしょう。

一つの学期に一つのレポート（論文）が完成させられるようにお手伝いできると幸いです。

『世界史入門』 対象：高校生以上 講師：岸本廣大

高校世界史レベルの知識を獲得・整理することを目的としたクラスです。基本事項の確認から受験対策まで、希望に合わせて指導いたします。世界史が苦手な方も、好きな方も大歓迎です。

『日本史入門』 対象：高校生以上 講師：岸本廣大

高校日本史レベルの知識を獲得・整理することを目的としたクラスです。基本事項の確認から受験対策まで、希望に合わせて指導いたします。日本史が苦手な方も、好きな方も大歓迎です。

『歴史講読』 対象：高校生以上 講師：岸本廣大

歴史に関する一般書を読み、その内容について、幅広く議論を行うクラスです。「入門」クラス以上の歴史や歴史学に興味のある方であれば、大歓迎です。なお、対象とする本は、受講者の希望に合わせて選ぶ予定です。

『歴史のダイナミズム』 対象：高校生以上 講師：小林哲也

高校の歴史の授業では伝えきれない歴史の「ダイナミズム」に触れます。毎回テーマを設定して掘り下げていくことで、歴史へのまなざしに輝きを生み出させます。

『ドイツ語文法／講読』 対象：高校生以上 講師：小林哲也

初級者が独力で読解をすすめるための基礎的力を養成するプログラムです。読解のテキストはヴァルターベンヤミンの『複製技術時代の芸術作品』の予定です。20世紀の古典として、読者に思考を促すような力があるものです。

●新しい講師の紹介●

四月から着任した新しい先生をご紹介します。

百木 漠 (ももき ばく) 京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程 1 回生

◎ 春学期の時間割 (予定) ◎

| | 4:20-5:20 | 5:30-6:30 | 6:40-8:00 | 8:10-9:30 |
|---|--------------------------|-------------------------------------|------------------------------------|---------------------------------------|
| 月 | | | | 高1英語 ラテン語入門 |
| 火 | しぜん A かが A かず1・2年 | ことば1年 ことば2年 A ことば6年 かず4年 A | 中学日本語の読み書き 中3英語 ギリシア語講読 A | 中1英語 中3数学 ギリシア語入門 ラテン語初級講読 A |
| 水 | かず3年 A | ことば3年 かず3年 B かず4年 B | かず5年 中2英語 高校物理 古文講読(高・一般) | 中1数学 中2数学 高校化学 ラテン語初級講読 B |
| 木 | しぜん B かが B ことば5・6年 | かず6年 A ウェブプログラミング入門 | 高2英語 高3英語 英語一般 | 高1数学 高2数学 高3数学 ラテン語初級文法 |
| 金 | ことば2年 B ことば4~6年 | かず2年 かず4・5年 かず6年 B | ロボット工作 ギリシア語講読 B | ラテン語初級講読 C ラテン語中級講読 |

NEW! 通信講座開設のお知らせ

ギリシア語・ラテン語の通信講座を始めます。
詳細はお問い合わせください。

かが自由製作の会

とき 3月14日(日)午後1:30~描ききる迄
場所 北白川幼稚園・第3園舎
対象 山の学校会員の小学生

将棋道場

とき 3月16日(火)午後4:30~6:00
場所 山の学校の教室
対象 山の学校会員の小学生以上

第2回 ことばの発表会

とき 3月19日(金)午後4:30~5:30
場所 北白川幼稚園・第3園舎
対象 山の学校会員の小学生

第18回 ラテン語のゆうべ

とき 3月19日(金)午後6:30~8:00
場所 北白川幼稚園・第3園舎
対象 ラテン語に関心のある方

第4回 勉強会

とき 3月20日(土)午前9:00~11:00
場所 北白川幼稚園・第3園舎
対象 小学生 (会員以外の方も歓迎)

瓜生山散策

とき 3月21日(日)午前9:00~12:00頃
場所 北白川幼稚園・園庭集合
対象 小学生以上とその保護者

なんでも 勉強相談会

とき 第1回 3月6日(土)午前9:00~12:00
第2回 3月17日(水)午後5:30~8:30
場所 山の学校の教室 / 対象 中学生以上
(会員以外の方も歓迎)

※ここにあるイベントは、
全て参加無料
です。

しぜんA（火曜）クラス

——干し柿を作ろう！

12月の初め、校舎南側の柿の木が、たくさんの実をつけていたので、干し柿作りをしました。さて、「渋柿」は、干すと本当に甘くなるのでしょうか。その前に、「渋柿」とは一体、どのような味なのでしょうか。まずは試しにそのまま食べてみよう、ということになり、勇気を出してみんなで食べてみると・・・「あれ？・・・甘い!!」普通の柿と変わらず、美味しいではありませんか! 「しっかりと熟れていれば、食べられるみたいだね。」この発見に嬉しくなり、しばらく味見を続けていると・・・「うえー!」渋い、としか言い様のない嫌な感覚が口中に広がり、苦笑い。渋柿という噂は本当でした。



1月下旬、干し上がった柿を、クラスの後にお土産で持ち帰りました。後日、尋ねると、「甘くて美味しかった」そうです。よかったです!



——鉱石を見つけよう！

12月下旬に、久々に沢へ下りて、そこで、春学期から作っていた琵琶茶を沸かして飲みました。この時に石採りをしたのをきっかけに、Aクラスではその後2回、石採りをするようになりました。一回目は、ハンマーを持って採石場跡まで、二回目は、行けるところまで上流を目差し、夢中になって袋いっぱい集めた石を観察しました。



さあ、隊長に続くぞ。



どれから調べよう・・・



この石は何かな・・・



この場所、気に入った!



めずらしいキノコだなあ。



冬いちごをみつけたよ。



すっぱーい。けど美味しい!



みて、おにぎりみたいな石。

——ひみつ基地をつくらう！

以前から「大きな仕事をしたい」という声があったので、秘密の森の中に、「秘密基地」を作ることになりました。



あっちはどう?



ここにきまり! 倒木をベンチに。



床もならして快適に。



これをここに、こうしてさ・・・



枝を挿して、ひもでつないで、



みんな、この竹もつかえるよ!



だいぶ囲まれてきたぞ。



これぞ「ひみつのかくれ家」。

しぜんC (木曜) クラス

しぜんの工作①〜森でみつけた材料で

秋学期の終わり、秘密の森の中へかけて、色々なものを拾い集め、それを材料に工作をしようということになりました。木の実や落ち葉、枝…集めることに夢中になって、作る時間が随分と短くなってしまいました。たまたま余っていた工作材料の紙コップと、ドングリを組み合わせた楽器を、みんなのアイデアで作りました。拾った落ち葉を輪ゴムにはさんで飾るアイデアも、彼らのものです。後日、T君がこの日のことを日記に書いてきてくれました。

「・・・三つおとがなります。たったとパチと シャカジャカのおとがなります。」



しぜんの工作②〜空気のちから

ある時「下敷きにガムテープの取っ手をつけて引き上げても持ち上がらない」という手品をSちゃん、Y君が披露してくれました。「空気が関係しているのかな・・・？」みんなが言います。その次のクラス、お返しに、「ペットボトルを、手を使わずに潰す」という簡単な手品をしました。まず熱湯を中に注ぎます。ボトルの口に頬を近づけると、風が当たります。少し待ってから湯を捨てて蓋を閉めると、堅い1.5Lペットボトルが勝手に「ベコベコッ」と潰れ始めます。「何で何で？」様々な憶測が飛び交いました。その後、空気の力を作った工作として、ストローで玉を浮かせるおもちゃ、ペットボトルの底を切り取り、ゴム風船をかぶせた「空気砲」を作って遊びました。火を灯した蠟燭の的の前に列を作り、代わる代わる狙います。うまく命中すると、ぱっと火が消えて歓声が上がりました。その後、工作魂に火がつき、空気砲は、豪華な宇宙銃のような格好に変化を遂げていきました。吹き矢を作ってくれた人もいます。



上手でしょ！



できたよ！



きまったね！

冬の探検①〜沢で乾杯！

昨年末、Cクラスでは初めて沢まで探検に出かけました。ひんやりと静かな秘密の森を抜け、険しい坂道を下り、無事にゴールにたどり着いたところで、温かい琵琶茶をいれました。「甘い香りが漂います。「うまいうまい！」「まずーい・・・」「あちあち」みんなが採取した茶葉。特別な味です。



ランプで煮ます。坂道も何のその。慣れっこです。

冬の探検②〜「たんけん地図」と「お山の図鑑」

『図鑑』を作りたい！というT君の名案を形にすべく、情報を集めるために森へ出かけました。お山の植物や虫や鳥がどこで見られるか、地図があれば、目次としても使えそうですね。さらに、Y君提案の「思い出アルバム」を合わせれば、最高の「しぜんクラス特製図鑑」が出来るはずですよ！



これは「エル(L)の木」？



こうすると本当の馬みたい！



いい枝を見つけましたね。



スキーだ、スキーだ！



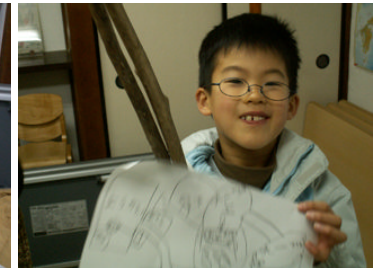
これは「綱渡りの根っこ」。



木の実や鳥の声、たくさんの発見を書いたよ！



よし、今日のたんけん地図が書けた！



(文責 梁川健哲)

冬学期では、自然の工作／生け花、絵画、鉱物採集、ピタゴラ装置作り／竹工作に取り組みました。自然の工作／生け花は、とくにDクラスの作品の完成が秋学期の終わりで、前号の掲載に間にあわなかったので、この場を借りてご紹介させていただきます。

※写真は、それぞれの取り組みごとに、上段4枚がBクラス、下段4枚がDクラスのものとなっています。

■ 自然の工作（B）／生け花（D）

森に分け入り自分で採集してきた、木の実や小枝、葉などが、自分で手を加えることによって、新しい命として生まれかわる体験。それは、積極的な自然との対話です。Bクラスは自然の工作、Dクラスは生け花に取り組みました。「ものづくり」という取っ掛かりが、普段とはちょっと変わった角度から、自然のイロとカタチを発見させます。



さあ、つくるぞー！



葉っぱをこうやってつけて…



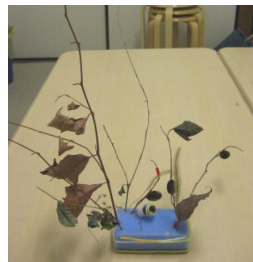
お洋服ができました！



こっちはネックレス！



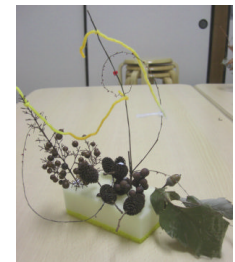
あ、この枝も使えそう！



Kちゃん作。繊細です



真剣そのもの

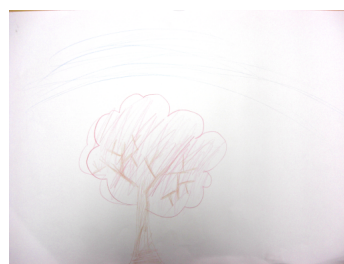


Yくん作。華やか！

自然は絵画のモチーフの宝庫でもあります。真剣に木や山と向きあう時間は、静かに感性を磨きあげてくれます。モチーフはお山のなかから自分で選んでもらいました。画材として落ち葉を使ってくれたS君やY君（Bクラス）、色づいた葉っぱを一枚一枚描き込んでくれたKちゃんやY君（Dクラス）など、みんなそれぞれに一生懸命でした。



見ている自分も描くNちゃん



Mちゃんの木は優しいです



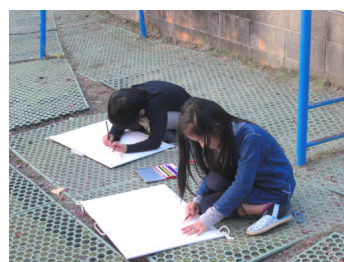
S君の大文字山は葉で色づく



「できました！」とY君



鮮やかな紅葉の前で



一心不乱に鉛筆を走らせて



葉を美しく描きこんだY君



繊細に色を重ねたKちゃん

■ 鉱物採集 (B・D)

秋学期のある日、DクラスのY君が自分の宝物を見せてくれました。それは、色とりどりの鉱物で、大事そうに箱に収められていました。目を輝かせながら説明してくれる彼を見て、いつか鉱物採集に出かけたいと思っていたのが、冬学期に実現しました。向かった場所では花崗岩が多く採れ、中に含まれている石英や黒雲母がきらきらときれいです。宝物探しに熱中して、帰り道ではポケットがパンパンでした。



あ！ ここにもある！



ぼくはこっちのほうに行く！



冬イチゴも甘くておいしい



こんなに採れました！



ここ、絶対になんかありそう！



きれいな石が層になってる



力仕事はぼくにまかして！



ほら、きれいでしょ！

■ ピタゴラ装置作り (B) / 竹工作 (D)

身近な木材を使った取り組みができないかと考えていたところ、あるときNちゃんが「ピタゴラ装置を作りたい！」とアイデアを出してくれ、Bクラスでは竹などを使ってオリジナルのピタゴラ装置を作りました。ピタゴラ装置というのは、NHKの「ピタゴラスイッチ」という番組に登場する、物の動きが連鎖していくからくり装置（ループ・ゴールドバーグ・マシーン）のことです。またDクラスでは、同じく竹で、湯のみや竹ぼっくりを作りました。竹を切り出すところから手作りした達成感は、きつとずっと残り続けることだろうと思います。



交替で切っていきます



うんしょ、こらしよ



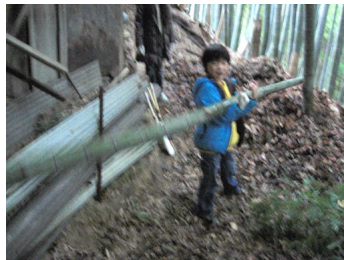
きれいに切れたよ！



完成まであとすこし！



ぼく、のこぎり得意や！



カもちでもあるY君



斜めにならないように



これでお茶飲むー！

■ 一年間を振りかえって

一年間、「しぜん」クラスを担当させていただきました。愉しく、一瞬に思えるような一年であり、濃く、学ぶことの多い一年でもありました。

昨年の春、クラスを担当させていただいた当初の、右も左も分からない状態から、自然の美しさ、美しさを発見する感性、感性を磨く姿勢を教えてくれたのは、まぎれもなく子供たちでした。私が前もって準備しておいた道は、じつは寄り道をするためにあるようなもので、その、心ゆくまで寄り道を楽しむ感覚、思いもかけない驚きを大切にする時間が、「しぜん」クラスの醍醐味だったのだらうと思います。

「せんせいー！」と呼ばれて行くと見せてくれた葉裏の抜け殻。揺れる木もれ日にハッとして見上げたときの樹々の逆光のシルエット。木の実や葉や枝で自分の作品を作っている彼らの真剣なまなざし。そのどれもが、きらきらとしたさわやかな思い出です。

(文責 高木 彬)

● 新たな素材との出会いから、発展へ。

冬学期のはじめ、2回に分けて、「水彩色鉛筆」「パステル」の導入となる課題を設けました。両画材の持ち味の違いをしっかりと感じられるよう、モチーフには同じ花を用いました。春学期には、お山に咲いている「金糸梅」や「アジサイ」を描きましたが、今回は、生花店で3種類の色や形の異なる花を選びました。「花は不断の友」などと言われるように大変身近な存在ですが、そうしたものからこそ、何かを発見する面白さがあるように思います。

細かい描写のできる色鉛筆の課題では、花の色や形を丹念に描写したり、水で溶かすのを楽しんだりする様子が見られました。特にパステルの課題では、塗った部分を擦ると色が広がる現象や、削って粉にしてから使う方法を気に入った様子で、丸々一本を粉にしてしまうのではないかとというくらいに金網ですり下ろす姿や、それを直接紙の上で行うなど、大胆な実験が繰り返されました。いつも、最低限の使い方だけを伝え、各自に使い方を発見してもらうようにしています。

● 「見えないもの」を描く

見えないものさえ見える形に表すことができる。これも絵画の楽しみです。ここでは、いわゆる「抽象画」に挑戦してもらいました。しかし「見えないものを、色や形に」と言っても、実際どのようにすればよいか、掴みにくいものです。そこで、最初にいくつかの具体例を示しました。例えば彬先生が選んでくれたキャンディンスキーの絵には「陽気な」という題名がつけられ、円や三角形、線などが賑やかにちりばめられています。モンドリアンの絵では、赤・青・黄の3色が格子状に塗られているだけです。それらを見ながら、「何の絵か」「どんな感じがするか」等を、みんなに考えてもらいました。他にも、一面に様々な色が溶け合うように塗られた絵や、音楽を絵画化したパウル・クレーの作品等を紹介しました。

趣旨が掴めたところで、「何を描くか」を各自に考えてもらい、制作に入ります。画材は、描きたいものに応じて各自が選び、異なる画材を組み合わせさせて使ってみることも、自由です。

A(火曜)クラスの仲間たちは、課題説明の後、沈黙の中で各々がイメージを膨らませます。物静かに絵画と向き合うのが、この日参加した3人のスタイルなのです。しかし、クラスの間、画面の上ではとても雄弁に語ります。何を描くかを告げぬまま、黙々と描き出した3人を、ワクワクしながらそっと見守ることとなりました。

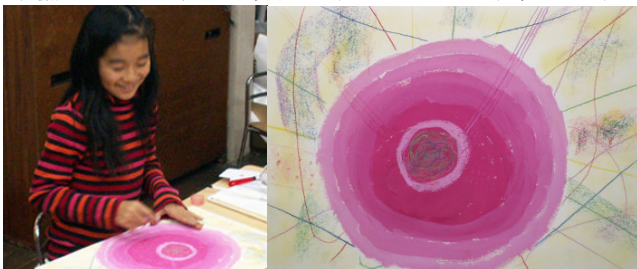


・水彩色鉛筆を走らせるり君の手に迷いが感じられません。そして、刷毛で大胆に濡らすたびに、絵がドラマチックに変化を遂げていきます。タイトルは「無題」。彼の心に秘められた「何か」が剥き出しになって迫ってくるようで、ドキッとさせられる絵です。(左上)

・静寂の中、ゴシゴシと力強くパステルを擦る音が、室内に響き渡っていました。完成後、Mちゃんがこっそりと教えてくれた題名は、「くもとかぜとひかり」。あのゴシゴシ音は「光」だったのです。塗り込める限界を超えて塗られた赤が、胸を貫きます。(上)

・Hちゃんは、初めての水彩色鉛筆を試してみたようです。ゆらゆらした細い線を何本も束ね、面白い形を作り出しています。彼女の画題も聞いていません。この不思議で明確な形が何を表しているのか、想像が膨らみます。(左)

B(木曜)クラスの仲間たちは、思いついたことを声に出し合っています。5年生のM君とCちゃんは最初、「命」「生命」といった言葉を掲げました。画題としては、気持ちや様子を表す形容詞が分かり易いだろうと予想していたこちらにとっては、ドキッとさせる名案に感じられました。そこから更に発展し、M君は「天国」、Cちゃんは「ハート」という画題を定めました。マークとしてのハート型を用いてよいものかどうか、少し迷っていた様なので、Cちゃんが思う「ハート(心)」の形を發明してはどうか?と提案してみました。クラス開始前、持参したクジラ図鑑を広げ、熱く語ってくれたK君の心はクジラと決まっています。抽象にこだわらず、クジラの登場する空想の絵を描いてみることになりました。逸早く絵の具を準備したIちゃんは、何を描くかは告げず、ひたすらパレットで混色の探求を始めます。



・画面一杯にやわらかく広がる同心円。所々にさしたパステルの色がアクセントになっています。完成した作品裏面に、タイトルを大きなピンク色の文字で、「幸」。これが、彼女のみつけた答え。彼女のハート、そのものです。

・M君の天国。画面下にあるのが「命の壺」だそうで、そこに魂が集まり、生まれ変わっていくというようなイメージだそうです。最後に大胆に塗り分けた原色が、何か深い、根源的意味合いを持つようにも感じさせる、興味の尽きない絵です。



・苦心して作り上げた！ちゃんの色には、独特の深みだけでなく、調和が存在します。驚きです。タイトルを訊くと、「虹と信号」。何とも詩的です。

・クジラの大膽な色使い。背中の上には街があるようです。水彩色鉛筆、絵の具を駆使した、様々な実験が盛り込まれています。最後の手がたも大正解！楽しさ満載。

●「音楽」を描く

今度は、前回の続編とも言える課題です。音楽それ自体もまた、目には見えません。ある一つの曲を聴いてもらい、心に浮んでくるものごとを描いてもらいました。今回は、抽象・具象を問いません。物語や空想の場面というのも有り得ます。とにかく、音楽から受け取った世界に、目を凝らし、それをそのまま表します。

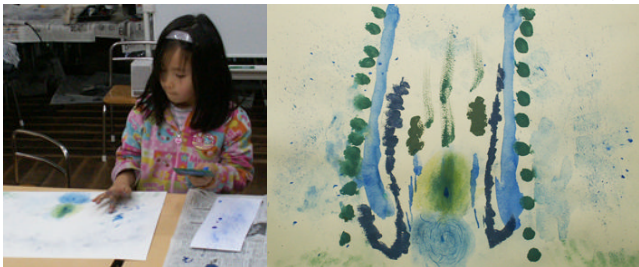
A (火曜) クラス



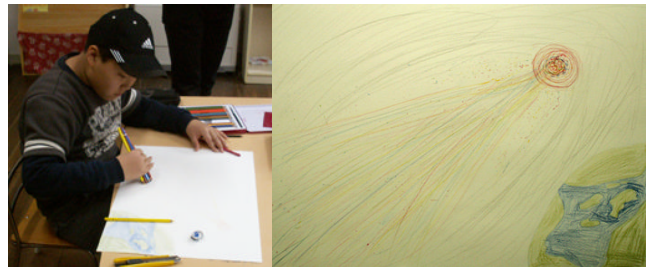
ゴマちゃんやイルカに乗って魚を追いかける少女達の嬉しそうな顔！



星々に惑星、不思議な模様。こんな楽しい宇宙へ飛び立ってみたいですね。



数え切れぬ程の実験と工夫。音がそのまま形になったかのようです。



何色もの色鉛筆を束ねた線はスピード感があり、不思議と優しいです。

B (木曜) クラス



好きなものをとことん描く。これぞ絵画。クジラたち、楽しそう！



表現の実験と発明の連続に、ワクワクさせられっぱなしです！



“宇宙の色”を考えました。何とも言えない不思議な色です。



リズムカルに筆をとりました。画面から音が溢れだしてくるようです。



・なるほど、あの不思議な曲を演奏できるとしたら、この子達に違いないですね。
“未確認飛行音符” 現る！姉妹の世界は一つのハーモニーを奏でているようですね。

ところで、その曲とは、一体何だったのでしょうか。敢えて、作品をご覧下さった方々のご想像に委ねたいと思います。

臆することなく試してみよう！

誰かが試してみたことが、それとなく周囲に伝播し、さらには発展していく様子が、クラスの中で感じられます。例えば、「パステルを粉にしてから使う方法」を紹介しましたが、山ができるほど摺り下ろす事も、画面の上に粉を振りかける事も、水に溶いてみることも、絵の具に混ぜてみることも、一切伝えていません。全ては各自の柔軟な発想による行為です。大変喜ばしく、称賛されるべきことです。描く方法に「こうでなければならない」という決まりは一つもありません。

ただし、一方では、各画材が持つ特質と限界、それらに伴った幾つかの基本的技法というものが変わらずにあり、これを理解することも豊かな表現を目指すためには必要です。クラスではこの側面についてもお伝えしています。しかし、本当の理解や納得は、長い時間をかけた体得の中でしか訪れないものです。だから今は、たとえ当てずっぽうでも、闇雲でも、ひらめきを実践することの方を大切にしています。焦る必要など全くありません。この試行錯誤の繰り返しを、心ゆくまで楽しみましょう。その先に、表現の無限の広がり、「自分らしさ」の発見が待っているはず。理想を目指して挑戦する皆さんを、これからも応援してゆきたいです！

(文責 梁川健哲)

表現するよろこび

だれもが最初は小さな画家なのに、年齢を重ねるにつれて絵を描かなくなってしまうのは、なぜでしょうか。

絵を描くには芸術的センスが必要だとか、豊かな想像力が必要だとか、相当のテクニックが必要だとか、そういう無闇にハードルを上げてしまうもろもろの言葉や、これこそが上手い絵だ、という固定観念が、かつての画家たちを、絵を描くことから遠ざけていってしまうのではないのでしょうか。

だとしたら、それは、もったいない、本当にもったいないことです。花の美しさに上下がないように、絵に上手いも下手もない。自分が描きたいものをそのまま素直に描くだけで、それが、その人にしか描けない、その人だからこそ描ける、たった一枚の美しい絵になるのに。

さて、それとは逆に、年齢を重ねても絵を描きつづける人もいます。

おそらくその人は、小さな画家であるうちに、周囲の大人から自分の絵を褒められることで、自分は絵が描ける、描いてもいいんだ、という自信を持つことができたのでしょう。その自信の根っこがあるかぎり、彼は絵を描きつづけることができます。

しかし、彼に自信を与えるその大人の評価は、往々にして既存の「上手い絵」という基準からなされています。絵を描きつづけているといっても、彼は、たまたまその基準に合致する、小学校のクラスにかならず一人はいる「絵の上手い子」だったのかもしれませんが。これでは、彼のようなほんのひと握りの優等生を育てる代わりに、たくさんの人に表現への劣等感を植えつけることになってしまいます。

この「かいが」クラスでは、こうしたこととはちがいで、だれもが、自分の素直な表現そのものに、自信をもつことを目指しています。自分の表現をそのままに肯定すること。それが、個性をこらすことなく、将来にわたって（絵画にかぎらず）表現をしつづけるための自信の根を育てることだと信じるからです。

冬学期の抽象画の取り組みは、このような意味でも、うってつけでした。

よく、抽象画はむずかしい、抽象画はよくわからない、という言葉を目にします。点や直線や三角形の謎めいた配置。タイトルはだいたい「無題」。つかみどころがない。奇妙奇天烈。意味不明。それこそまさに、抽象的な印象しかわいてこない。

だから、そんな大人にもわからないむずかしいものを、ましてや子供にわかるわけがない。そう思う人もいるかもしれません。

ただ、抽象画の面白みは、そうしたつかみどころのないもの、目に見えないものを描きうるところにあります。たとえば、「感情」というものそのものは目に見えないし、物としてどこかに置くこともできない。しかし、具体的なモチーフを描写していく静物画とはちがって、抽象画は、そうした目に見えないものを直接的に目に見えるようにすることができます。

もちろん、具象画・静物画に取り組むことの意義は、こうしたこととは別個に、厳然と存在します。しかし抽象画においては、モチーフをお手本どおりに上手く写せているかとか、これを描くのにこの技法は適しているかとか、そういう外側からの評価軸をもちこむ必要がありません。強いていえば、評価の基準は作者の内側にあります。描かれたものが全てなのです。

こうした意味で、抽象画の取り組みは、相対的な評価からいったん離れたところで絶対評価しやすいし、描いた本人にとっても、評価を自信に変えやすいのだらうと思います。自分のなかにあるものをそのまま素直に描くことが、だれにも真似できない、世界で唯一の自分だけの絵を生むことになる。それが、抽象画に取り組むことの良さです。

前2ページをご覧くださいれば一目瞭然ですが、実際に取り組んでもらうと、それぞれの生徒が、それぞれ画材や描き方を工夫して、驚くほど豊かに個性を発揮してくれました。これを見れば、子供に抽象画はどうか、という懸念が、杞憂に過ぎないことがはっきりします。

彼らは小さな画家です。彼らの純粋な表現を、つねに温かく評価することを通して守り育てながら、表現することのよろこびを知り、年齢を重ねてもそのよろこびの灯を絶やさぬ人間になってほしいと、私たちは願いつづけています。

(文責 高木 彬)

『ことば』 1年生A・B(火2限・金1限) 担当 福西亮馬

冬学期は『俳句』や『百人一首』(ぼうずめくり・源平合戦)をする一方で、新しく『推理クイズ』と『暗唱』に取り組みました。今号の記事はこの二つに絞らせていただきます。

『推理クイズ』では、一番最初に次のような問題を出しました。

しめきった部屋の中に、かごに入った六つのりんごが置いてあります。そのりんごを、六人の女の子に一人一つずつ配ったところ、かごの中にはまだりんごが一つありました。それはなぜでしょうか？

この問題は、一年生にはインパクトが大きかったようです。Aクラスでは、Iちゃんがまず「それは…ですか？」と頬を赤らめながらも積極的に質問してくれました。またそのIちゃんを囲んで、Ry君もRi君もY君も、肩を寄せ合わせながら一つ所で相談し合っていました。それが今の原点です。またBクラスでは、答が出ないまま次回に持ち越したのを悔しがって、山を下りる間ずっと質問していたT君のことが印象に残っています。さて、その時お休みだったMちゃんにも問題を送っておいたところ、次週、誰よりも早く手を挙げてくれたのがこのMちゃんでした。そして見事に正解を言い当てて一躍ヒーローとなったのでした。それ以来、T君もMちゃんも、今ではたくさん質問を出して盛り上げてくれています。

彼らもやがて今の二年生クラスでしているように、問題を自作したり、より積極的に自分の意見を出してくれるようになるでしょう。『推理クイズ』は、山びこ通信の巻頭にもありますように、大いに『思う』(自分なりに考える)の部分で、これからも大事にしていきたい取り組みです。

一方『暗唱』は、その点で思えば『学ぶ』の要素です。これは俳句からの接続で、最初は『寿限無』など、テレビでもなじみのある落語から題材を採りました。今ではだいぶ難しい『祇園精舎』にも挑戦しています。

さてその覚え方ですが、最初は自分の席で復唱してもらいます。そして離れた場所に私が座って待ち、そこへ自信のある生徒から順に並びに来てもらいます。並んでいる間も小さな声で練習です。そしていざ本番となり、対き合った私と、しっかり言える部分がどこまでかを確認します。言葉が詰まって出てこなくなると、「ああ〜…」と実に悔しそうに席に戻っていきます。Ri君がこの典型で、緊張しては何度も並び直してくれます。一方自信がなくなりかけている生徒がいたら、ちょっと呼び止めて、私の声に従って耳で覚え直してもらいます。そして励ましてから席に帰します。三十分近くこれの繰り返しです。それでも一向に飽きたと言う生徒が現れないのが不思議なぐらいで、一年生はまるで「吸い取り紙のようだ」と感心します。「後で百人一首はしなくていいから、こっち(暗唱)を続けたい！」と言う生徒もいるぐらいで、『暗唱』にかける一途な思いが伝わってきます。

さて一、二週間もすると、その変化は目覚しく、みるみるうちに「全部覚えたよ！」という生徒が現れます。きっとお家でも応援してもらっているのでしょう。それを披露する時の自信に満ちた顔を拝見するのは、とても嬉しいことです。Hちゃんのお家では、先に覚えたお兄ちゃんについて真似るなど家族ぐるみで取り組んでくれていると聞き、ほほ笑ましく感じました。その栄養を吸って、Hちゃんは毎週の自分の到達点をとても誇らしげに語ってくれます。またSちゃんは勉強会でも、完全な文章を2回暗写していました。こちらにもすっかり驚いてしまいました。

もちろん、いつでもモチベーションを保つことは難しく、日によってはくじけることもあります。しかしこの間はそのことで大変嬉しいことがありました。それは、K君が「今日のぼくは頑張るんや」と授業の最初に宣言してくれたことです。言葉通り、K君は自発的にお手本を横におきながら、紙に書いて一生懸命覚えてくれていました。このような展開があると、私自身も大変やり甲斐を感じます。

「刮目」という言葉がありますが、1年生のポテンシャルと日々の成長にはまさにそれが思い当たります。二年生になってもぜひ元気に山道を上がって来て、ますます先生・先輩陣を驚かせてほしいと思います。

(文責 福西亮馬)

『ことば』 2年生(水曜1限) 担当 福西亮馬

今学期は、秋からの取り組みで、とりわけ『詩作』に力を注ぎました。生徒たちが自分で作った『推理クイズ』や『百人一首』のことも書きたかったのですが、それについては山の学校のブログに稿を譲るとして、今回は詩について一言語りたと思います。まずは「百聞は一見にしかず」、生徒たちの作品を一部だけでもご覧になっていただければありがたいです。

『字』 K.M.

字はなにで書くのだろうか？
それを考えた。
考えたけっかは、
えんぴつ、
シャーペン、
ボールペン、
マジックなどだった。
シャーペンでなんだろうな？
シャーペンでかいてみたいな…。

『風がふく』 K.T.

風がふく、風車がまわる、
目がまわる。
風は、なぜふくの。
風がないとどうなるの。
風は、いいのか、わるいのか。
風がきついと
たい風で
もっときついと
たつまきだ。

『火』 H.H.

なぜ火は、おきるんだろう。
手と手を、こすりあわせると
あったかくなる。
それは木をこすりあわせて
火をおこした時の
よわい時なんだ。

『ひやくじゅうの
王じゃライオン』 S.N.

ライオンは
ひやくじゅうの王じゃ
「すごいな」
ライオンは
どうぶつの中で
いちばんつよい
でもライオンも
いつかしぬ
かわいそうだな
まだあるものも
ずっとあるとはかぎらない
ライオンでもたいせつないのち
いつまでものこしてたいね。

『時間』 K.Y.

もし、せかいじゅうのとけいがなく
なっても、時間はなくなっていな
い。もし、月がなくなっても、時間
はちゃんとあるはずだ。

もし、今が、きょうりゅうのじだい
になっても、時間ならどうい
うせかいになってもあるはずだ。

時間というものはいったいだれが
つくったのだろうか。

『ころ』 T.K.

わたしは、ときどき思う。
自分のこの目で見ている赤や青と
いう色々な色は、ほんとうは、ちが
う色ではないか。
自分のこの口で語っていることが
べつのみでつたわっているのでは
ないか。
自分のこの耳で聞いている鳥のな
き声や、風、赤子の生まれる声はほ
んとうはないもので、つくったもの
ではないのか。

でも、このようになんしんりよ
ろこんだりふしぎに思ったりできる
のは、わたしが生きものだからなん
だ。わたしは、生きもので、いや、
人げんで、よかったと思う。

これらの詩からは、2年生たちが大人と変わらぬ深い思索生活を営んでいることが伝わってきます。彼らは独自の「目」を持った詩人であり、哲学者であると思います。最近の発見ですが、子どもたちの「理屈」はそのま詩の響きを持っています。これはむしろ大人の方が真似できないメリットで、今それを書き残しておくことは意味があることだと思えます。

よく誤解されることですが、詩を作るために何も特別な言葉は必要ありません。その秘訣はただ「静かになること」です。それは才能というよりは、ふだん誰にでもできることなのです。そのための時間を子どもたちは大人よりも多く持っていますが、残念なことにその大人が注意して見守らない限り、彼らの時間はなかなか動き出しません。私などが言うまでもないことですが、詩のよさとは、一元的なものさしでは決してはかるところにありません。現代では、大人も子どもも安易に比較することに慣れてしまい、同時に打ち疲れています。そうした、あたかも海の波の数に一喜一憂するような精神にとって、詩は安全な港と碇の役割を果たします。それを心の中に一つでも築いてほしいという願いを込めて称揚しています。

一方そうした活動の後で、時間がある時には『素話』をしています。今学期も引き続き『ギリシア神話』を取り上げました。今学期はイアソンの『アルゴ号の冒険』と、『クレタ島』にまつわる物語でした。それぞれ「物語群」と呼べるほど長いので、2年生にふさわしい部分だけを順序だてて案内しました。クレタの話だけをとっても、たくさん名場面があります。ラビュリントゥス（迷宮）を作るダイダロス、ミノスの牡牛を退治するテセウス、アリアドネの糸車、蠟の翼とイカロスの墜落などなどです。それでも私が紹介したのはほんの一部です。興味のある生徒は、大人になってから自分でも紐解いて欲しいと思います。

また、特に興に乗って話したのは、背景の神々についての脱線話でした。たとえばテセウスとアリアドネの話の後日談には、ディオニュソスという葡萄酒の神が登場するのですが、この神に逆らうと、どんな知恵者でも狂人になってしまうという話があり、小学生には空恐ろしく聞こえたようです。

また発明家のダイダロスが、鍛冶の神ヘパイストスの寵愛を受けているということから、ヘパイストス自身の話になりました。彼はゼウスとヘラの息子で、手先が器用な反面足が萎えていて、容姿はきわめて不細工な神様です。そこで「彼が結婚した相手は次のうち誰でしょうか？」というクイズを出してみました。「1. 知恵と技芸の女神アテネ、2. かまどの女神ヘベ、3. 愛と美の女神アプロディテ（ビーナス）」すると生徒たちは口々に「1番！絶対1番！」と声を張り上げましたが……。残念！3番なのです。「ええ〜？」と信じられない様子でした。また彼がゼウスとヘラの夫婦喧嘩に「まあまあ…」と割って入ったところ、「お前は黙っている！」と矢庭にゼウスにぶん投げられて、ギリシアのオリュンポス山からクレタのイダ山まで飛んでいった話などは、2年生には笑いのつぼだったようです。

残り回数も少ないですが、せっかく盛り上がった「神様ばなし」なので、最後は『ギガントマキア』を話してしめくりたいと思います。これには、山の上に山をどんどん積み上げて、オリュポスの頂上に攻め登ってくる巨人ミマスとエンケラドス、そして世界の怪物テュポーンなどが登場します。それに対抗するのは、雷電を振るゼウス、黄金の弓弦^{ゆんづる}を鳴らすアポロン、神盾^{アエギス}を持つアテネ、神となって活躍するヘラクレス、など、オリュポスの神々の歴史を歌い上げます。ぜひ最後までお楽しみに。

(文責 福西亮馬)

『ことば』 3年生(金曜1限) 担当 小林哲也

前学期のこの「ことば」クラスでは、読書の秋ということもあり、朗読や読み聞かせを中心に物語や詩から二人の子が色々と吸収してくれることに主眼をおきました。それに対して冬学期は、外側へ向かって表現することに重点をうつして勉強をすすめ、二人がそれぞれ継続的に「自作の本」をつくっています。

O君は「ひみつ道具百科」をつくっています。絵と文章で道具を紹介、説明するのですが、アイデア構想と具体化がうまくいって感心します。I君は想像力がとまらないようで、毎週どんどん物語をつむいでいます。表現力が豊かで、口語的表現と擬音とともに話がふくらんでいきます。二人とも、自分のアイデアを形にすることにまず単純に喜びを覚えるようで、とても熱中して書いていて筆が止まることはありません。「ことば」での表現には、 $1 + 1 = 2$ に相当するような「唯一の正解」はありませんから、自由奔放に表現を楽しむということ、その喜びを大事にすべきものだと思って見守っています。

ただ、気分にかかせて好き勝手に書き散らすのは必ずしも良いこととは言えないかもしれません。何かを書くことは、或る意味ではつねにそれを見るであろう他者を前提とするべきものですし、自分のアイデアをことばとして記すとき、そのかたちになったことばに対して「責任」をとらねばなりません。書いたものが理解されなければ、それを説明する必要も生じますし、質問されたら答えないといけません。また、へんなものを書けば笑われてしまうかもしれません。さらに表現したことば自体への「責任」もあると思います。自分の発し、形にした「ことば」を見つめ、自分の考えや振る舞いを捉え返す必要があるように思うのです。そのためには、生産的ではないように思われますが、筆を止めてみる時間も大事なことでないでしょうか。

三年生にそういった責任を考えさせるのはまだ早いような気もしますが、指導していて、いつも「責任」と「喜び」のバランスを考えてしまいます。「喜び」を活かしながら「責任感」もつくというのが理想ですが、試行錯誤を繰り返しています。

山の学校には秋以来「ことばの発表会」という場があります。学年の違う子どもたちや講師たちの中で、それぞれクラスでの勉強の成果を公表したり、発表を行ったりします。こうした機会に、自分たちで表現する喜び、それを聞いてもらえる喜び、認めてもらえる喜び……様々な「喜び」がそこで感じられることと思います。また自分の表現への「責任」も少なからず感じることでしょう。冬にも発表会が企画されていて、二人は自作の本について発表する予定です。発表の場で生じる「喜び」も「責任」も受け止めて「ことば」への感受性を高めてくれればと願っております。ちなみに秋の発表会では二人は紙芝居を堂々と演じきっており、今回も楽しく、そしてしっかりと取り組んでくれることと思います。

(文責 小林哲也)

『ことば』 3~5年生(金曜1限) 担当 高木 彬

このクラスでは一年間かけて物語の創作に取り組んできました。ここでは、生徒たちの近作をご紹介します。

冬学期から新参加のMちゃんは、『お姫様とまじよの物語』の第一巻を完成させてくれました。三姉妹のお姫様たちは、ある日、読んだ本のなかに出てきた“まほうのつえ”を探しに旅に出ます。三姉妹はそれぞれ性格が違い、それが物語に厚みを与えています。末っ子の“あい”は直感性に優れていて、まほうのつえをなんとか横取りしようともくろむ隣りの国の悪い魔女の存在を察知し、ギリギリのところまで回避します。そうした、お姫様たちと魔女との駆け引きも見物です。Mちゃんは物語を創るコツをつかんでいます。一卷では、まだ冒険に出発したところ、といった感じで書かれているので、ここから先の物語の広がりにも期待しています。

Kちゃんの『カワイイ4人のおはなひめ』は、ピンク、オレンジ、ブルー、イエローの、4つの宮殿に住む、お姫様たちのお話です。それぞれのお話は同時進行し、クライマックスのローズの結婚式で合流します。なんとも巧みな構成です。しかしこの構成は、じつはこの創作クラス自体から生まれているもののようです。

4人のおはなひめは、それぞれ、このクラスの生徒をモデルにしているのです（この物語は、Mちゃんが参加する前から書かれはじめたので、おはなひめは4人になっています）。前作の『おやまの学校』もそうでしたが、Kちゃんのお話は、クラスの和やかな雰囲気そのものを封入したかのようです。また、会話文と語りの文がテンポよく重なっていて読みやすく、次のページをめくりたくなるような演出の工夫が随所に見られます。それは、最新作『Sweets Mystery Series -Ice Mystery-』にも受け継がれています。

有名モデルの母親に憧れる中学生、マミは、あるきっかけでドレス大会に出場し、従姉妹のユウとともに、みごと優勝と準優勝を飾り、念願のモデルとしてデビューします。マミはニューヨークに渡って世界的に有名になっていき、またユウは、パリの美術学校に入学して芸術家としての道を歩み始めます——。Rちゃんの『ママはうわさの有名人』には、モデルとして活躍する有名人の母親に憧れて、夢を持っていく女の子の姿が楽しく描かれています。それはまた、Rちゃん自身の憧れでもあるように思います。こうだったらいいな、という気持ちが、素直に表現された秀作です。

Jちゃんは多産な作家で、この秋学期から冬学期にかけてだけでも、本を5冊も完成させています。いったいどこからそれぞれに独創的な物語のイメージが湧いてくるのか、目を見張られます。ファンタジーの世界を描いた『フェアリーの森で』。魔女のピピとペペが活躍する『モチたん＆ピピのまほうの本』。20歳までしか生きられないと医者に宣告された美姫が恋人の竜のために必死に生きる『きみのためだから』。修行を積んで忍者になった“くろ”が悪者から家族を守って母親の秘密を知る『にんじゃのしゅぎょう』。クリスマスの準備をしながら次第に気持ちが高まっていく、最新作『クリスマスまであと5日』。それぞれ、豊かな想像力の飛翔が感じられる作品ばかりです。さて、現在Jちゃんが書いているのは、最新作の続編『クリスマスまであと4日』です。「ぜったいに5冊、シリーズにする！」と意気込み充分です。彼女の初の試みを応援していきたいです。

もしかしたら、Jちゃんが息の長い物語を書きはじめたのも、いつも隣りの席で黙々とひとつの連作を書き綴っているAちゃんに刺激を受けたからかもしれません。Aちゃんの『PARIS バレエ Diary』には、主人公のエリーが、パリのロイヤルハウス・バレエ学校に入学して、初レッスンの日を迎え、友人たちと助け合いながら、憧れのロイヤルバレエ団との共演に向けて成長していく様子が、優しく繊細に描かれています。かつて王宮だった学校内の探検や、ロシアのバレエ団から転校してきたクララ・スクロフの登場など、楽しいエピソードも盛りだくさんです。すでに二巻目までは完成していて、現在、三巻目に突入しています。この作品もRちゃんと同様、Aちゃん自身の憧れの結晶でもあるように思います。そしてそれは、Kちゃんが『カワイイ4人のおはなひめ』の「まえがき」に書いてくれていた、「わたしはいつかおひめさまになって、おしろにすんで、めいどがいて、しあわせで、ごうかな生活を『一回だけしてみたい』と思う事がなん回もありました」という気持ちと同じものです。次の学年へ進んでも、そうした夢や憧れを追い求める気持ちを忘れずに、自己表現の糧にしていって欲しいと思います。

（文責 高木 彬）

『ことば』 4・5年生(木曜1限) 担当 福西亮馬

このクラスでは、『物語を作ること／読むこと』を一つのテーマにしています。前号に『物語作り』のことを書きましたので、今号はもう一つの『本読み』についてお伝えしたいと思います。

冬学期は『ポアンアンのおい』(岡田淳／作)という本を一冊読み終えました。その読後感をみんなで分かち合えたことが何よりの収穫です。

今回、読み方にも一味工夫して、詰まったら交替するという、いわゆる「ストップ読み」というルールを取り入れました。すると嬉しいことに、Eちゃんが目覚しい活躍を見せてくれました。Eちゃんは注意深く字面を追いかけるので、とても安定感があります。そして普段でも八十から百、多い時では二百もの「。」

(センテンス)を読破する勢いがある、以前「。」読みで上手だったMちゃんも、「Eちゃん、すご〜い！」と目を丸くして声援を送ってくれました。この取り組みをきっかけに、Eちゃんの表情が前にも増して明るくなってきたように思います。

ここでEちゃんをもう少し例に挙げると、もともと『推理クイズ』が得意だった彼女は、これで自信の柱を二本揃えたことになります。もしも、あと一つ得意なものを見つけて、三本柱を揃えてくれるなら、「ことば」への自信は揺るぎないものになるでしょう。作文、詩、俳句、書き写しなど他のジャンルは色々あります。それと同じことを、Aちゃん、Mちゃん、H君にも期待しています。

さて『本読み』のことに戻りますが、もう一つ驚くことは、全員が自分の読んだ箇所だけでなく、お互いの内容をよく憶えているということです。音読は必ずしも「文意」まで届かずに、「字」を「音」に変換することで精一杯であってもおかしくないのですが、その点はむしろ流石だと思わされます。特にAちゃんとMちゃんは、物語に配された伏線を思い出し、「次はきっと、こうなるんとちがう?」「ポアンアンなん

か、『あれ』を使ってやっつけたらいいのに！」と、自ら話の先を組み立てて、感情移入しながら読み進めていました。

そして、とうとう一冊を読み終えた時には、みんなほっとした面持ちでした。さてそうすると次は否が応でも「もう一冊読みたい！」という意欲が湧きます。その期待に応えられるよう、今度は一段と深い内容の『二分間の冒険』（岡田淳／作）を選びました。これがまた彼らにぴったりの面白さで、Mちゃんに至っては「今日は本読みある？ 本当にある？」と何度も聞き返すほど楽しみにしてくれています。ぜひ物語の魅力を最後までみんなと分かち合いたいと思います。

読書は言うまでもなく個々の精神の拡がりを応援するものです。しかし、「いつ」「どこで」というその体験の仕方は様々で、たとえば横で掃除機をかけられながら部屋の隅で丸くなって読み耽っていたり、寒さを我慢しながら毛布を羽織って夜遅くまでページを繰っている…というような、おそらく小学生の時期における深い経験は、大人のあずかり知らぬところでなされているものなのでしょう。そう考えれば授業はそのきっかけ作りに過ぎませんが、「読書とは非日常的で、楽しいもの！」ということを知ってもらおうお手伝いができればと考えています。

また一月は、晴れやかに『ぼうずめくり』、『^{あおかんむり}青冠』、『源平合戦』をしました。とりわけ『^{あおかんむり}青冠』という絵合わせに近い遊びには風情があります。私も初めてでしたが、やってみてまず感じたことは、日本の伝統文化の深さであり、昔の人がこのような遊びを作ったことへの「えもいわれぬ」親しみでした。こうした遊び心は、一見何の役にも立たないように思えますが、昔の人が子ども時代にそれをして過ごしたような仕方、歌を見慣れるところから、和歌の世界へと誘われていくのはむしろ自然だと思います。もちろん俳句の世界にもつながっていることでしょう。「急がば真直ぐ」の忙しい（そして同時にTVゲームの盛んな）現代だからこそ、ますます大事な要素だと思います。

（文責 福西亮馬）

『ことば』 5年生(火曜2限) 担当 高木 彬

ふつう、本を読むことは、個人的な営みです。しかし、おそらく誰もが最初は、親の読む声を聴き、親の声に自分の声を合わせるころから出発しているはず。私がこのクラスで目指してきたことのひとつは、生徒と講師が一体となって共同で朗読することを通して、本を読んでいくことの心地良さを再発見することでした。誰もが経験のあることだと思いますが、息の長い読書のためには、独特のリズム感が必要です。まずは平易で親しみやすい文章によって読書のリズムというものに触れること、それが、次の読書へ、そして将来の読書へと向かうきっかけになると思います。

秋学期から『ガリバー旅行記』を読んできて、冬学期でとうとう読み切ることができました。とりあげたのは「子どものための世界文学の森」シリーズ（集英社）に入っている、小学生用に「小人の国」と「巨人の国」のみに編集されたものです。毎週、一章ずつ朗読しました。単行本まるまる一冊なので、途中でだれてしまわないかと最初は若干の心配もありましたが、やはりそんな心配は無用でした。読み終えてみると、「続きも読みたい！」と言ってくれました。それで、冬学期の残りの期間は、ワン・ステップ上の「少年少女世界文学館」シリーズ（講談社）で、次の「空の国」（ラピュタ）を朗読しています。

また並行して、朗読で自分が担当したページの書き取りも行っています。各自が一ページごとに原稿用紙を一枚使い、それらをまとめて最終的には一冊の本にします。春学期の『オズの魔法使い』の頃から取り組んでいるこの書き取りも、秋学期以降とくに定着してきていて、自発的に、ひらがな表記の部分を漢字に直したり、一字一字を書道のごとく丁寧に書いたりしてくれています。『ことば5年生版・ガリバー旅行記』の完成が楽しみです。

一冊目の『ガリバー旅行記』を読み終えたので、最近はその続編の創作も行っています。以前の『オズの魔法使い』の時と同様、今回も生徒たちが希望してくれました。「待ってました！」と言わんばかりに、熱心に取り組んでくれています。彼らにとって、朗読や書き取りから創作へ、インプットからアウトプットへの流れは、吸い込んだ息を吐くように、自然なことなのです。しかも今回は、長い時間をかけて本を一冊読み切っています。吸い込んだ息は大きく、それだけに吐く息も大きいものになるでしょう。

この他にも、「漢字（熟字訓）」や「ひみつ道具」の取り組みも継続しています。熟字訓では、たとえば、「蒲」（ガマ。伏せる）＋「公」（雄。力強い）＋「英」（はなぶさ）＝「蒲公英」（たんぽぽ。地に伏せた力強い花房）というように、成り立ちとセットで学んでいます。興味を持ってくれているようで、生徒の一人は、あるとき以来、新しく買ってもらった難読漢字の本を毎回持参しています。クラスの持ち時間を越えても、余韻に浸るように、みんなページを繰ることもしばしばです。

（文責 高木 彬）

昨年度は秋学期の終わりから冬学期にかけて『銀河鉄道の夜』を読みながら作文に取り組みましたが、今年度も、今の時期は物語を読んでいます。その物語とは、ミヒヤエル・エンデの『モモ』。言わずと知れた名作です。一章ずつ読んで、その都度、内容に応じて作文をしています。

第六章「インチキで人をまるめこむ計算」は、お客と長々と会話をしながら仕事をするのが大好きな理髪師のフージーをはじめとするほとんどの大人たちが、時間貯蓄銀行からやってきた「灰色の男」の理詰めの説得によって、「時間を大切に作る」という名目のもと、時間に追いまくられるようになってしまうお話です。「時間をケチケチすることで、ほんとうはぜんぜんべつのかなにかをケチケチしているということには、だれひとり気がついていないようでした。」この章を読むだけでも、「時間とはなにか」ということについて、深く考えさせられます。

そこで、T君とU君には、この章を踏まえて、「時間とはなにか」を自分なりに考えて作文してもらいました。(400字/30分。括弧内は私の補足。他は原文のまま。)

時間とは

T・K

ぼくは、時間はいらないと思いました。なぜなら、(普通は)遊ぶ時間でも勉強する時間もほとんどきまっています。しかし、(本来は)時間がきまっていなければ、遊ぶ時間も勉強する時間も長くても短くてもいいからです。でも時間がなければ、生活がみだれます。なので実際は必要です。

時間とはすごくじゅうようです。しかし、考えてみるとすごくせつがちです。なぜなら学校に行く時間がたとえば八時三十分だとすると、どんなに「まって」といっても、時間はまってくれません。また別に、勉強する時間がすごく長くても遊ぶ時間はすごく短いです。このように時間はふつうでも、感じ方ではぜんぜんちがうということです。

ぼくは時間をゆうこうに使い、すますことを早くやって早く自由な時を作りたいです。

T君は、時間とは待たないで生活を区切っていくものであり、同時に、感じ方によって伸び縮みするものであると考えてくれました。伸び縮みするのだからそもそも時間という区切り自体が有効ではないとも言えるし、しかしそれなくしては生活も成り立たない、という両義的な事情を、彼の文章はよく捉えています。

時間

U・K

ぼくは時間とは感じるものであり、心であると思います。

「感じるもの」というのは、季節や太陽、動物など動くものを感じるということです。もし自分以外、何もない暗い世界にいたとしたら、時計は動いていてもぼくは時間ではないと思います。一定に動く物がない限り時間はないのです。

「心」というのは何も考えないようにしようと思っても考えてしまうということです。ぼくは本を読んだり、図工をしている時は一時間でも五分に思えます。逆に遊園地で機械に乗る前に待たされる時は一秒が三十分に思えます。時間とは人がある意味自分で動かせるものなのです。

時間とは何か、ということはガリレオでもニュートンでも分かりません。ただ時間は大切なものだということが分かります。

U君が書いてくれたのは、動きによって感じられ、またその心的な感覚によって動かせるもの、それが時間である、ということでした。時間と感覚の相互的な関係を、「動き」を蝶番として卓抜に取り出してくれています。よく練られた思考が400字に結晶化しています。

二人に共通しているのは、自分の頭で考え、自分の言葉で書いているということです。この姿勢のまま、中学校でも大きくはばたいてくれることを願っています。

(文責 高木 彬)

早いもので去年の春にはピカピカの1年生だったこどもたちが、去年より少しお兄さん、お姉さんになって、また新しい春をむかえようとしています。引き続き福西先生と分担しながら「かず」のクラスのこどもたちを見守ってきましたが、みな着実に大きくなってきているのが感じられます。勉強にも今まで以上に集中して取り組む姿をみせてくれました。

冬学期は春や夏よりも計算に取り組む時間を増やし、普通の足し算・引き算から、穴埋め式、25マス計算など様々な形式で毎回問題を解いてもらいました。繰り返し繰り返しの取り組みを通じて計算を体得してもらうためです。ときには「また計算？」という「嘆きの声」を上げる子もありましたが、取り組み出すと打って変わって集中し、もくもくと計算していきます。子どもたちが自信をもって落ち着いて計算をすすめるのを見て、頼もしく思うことしばしばでした。普通の計算では飽き足らない様子も見られるので、「魔法陣」などのパズル的问题をおりませてみんなを驚かせようとこちらもいささか必死でした。みんな空いたマス埋めて魔法陣を完成させていたのにはとても感心しました。

春から難度をあげつつ取り組んでいる迷路でも、わからなくなっても投げ出さず、また人に頼らず、自分でゴールまでたどり着こうという意欲が見られるようになって、これもとても嬉しいことです。「この道はちやうから、こっちやねんな」などと言いながら、別の道を探す姿は愛らしくもあり頼もしくもあります。思い通りにいかなくても投げ出さない根気強さと、間違ってしまったても再チャレンジできる自信と余裕がついてきたようです。

この一年、こどもたちのこうした成長を見ることで、こちらも成長の糧をたくさんもらいました。こどもたちはまた新しい春の日を浴びて、いっぱい根をのばし、背を伸ばして大きく成長していくのでしょうか。勉強に遊びに元気に取り組みながら、みんな健やかに育っていくことを願っております。

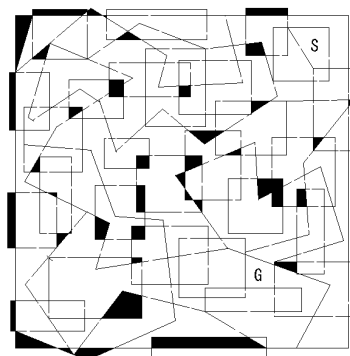
25マス計算

| | | | | | |
|---|----|---|---|----|---|
| + | 10 | 5 | 8 | 11 | 9 |
| 2 | | | | | |
| 4 | | | | | |
| 6 | | | | | |
| 7 | | | | | |
| 9 | | | | | |

魔法陣 どの列も足すと15

| | | |
|---|---|---|
| 8 | 3 | 4 |
| 1 | 5 | 9 |
| 6 | 7 | 2 |

やや複雑な迷路



(文責 小林哲也)

『高くジャンプするために』

1年生の最後の学期は、これまでよりもバリエーションをつけて、『数の感覚』と『純粹思考』を磨くことに取り組みました。それは2年生に向かってより高くジャンプしてもらうために、いわば深く「しゃがむ」ことを意図しています。当初は『文章題』のような発展問題を考えていたのですが、よく考えれば、そちらはまだ復習で取り組むチャンスがあるので、優先順位をつけるとすればそれよりもまず基本となることに重点を置きました。

さて先の『純粹思考』についてですが、迷路や間違い探しに加えて、パズルをしています。今では論理^{ロジック}で答を追い詰めることに本格的な楽しみを覚えてきました。そこで『足し算パズル』というものを取り入れました。これは『かず4年』の稿でも紹介していますが、限られた数しか使わないにも関わらず、場合分けや必然を「よく考える」勉強になります。

最初は3マス(従って数は1、2、3のみ)でスタートしました。それを1週間に5問ずつ、15問ほど解き終えたところで、今では4マスの問題に挑戦しています。最初は苦戦していても、やがてすらすらと解けるようになり、その一年生の力には驚きました。この手のパズルが得意になると、ヒントを探し出す姿勢が身に着くので、文章題でも当てずっぽうではなく(よくあるのは、文中の数字だけを拾って適当な式を作ってよしとする姿勢です)、正しい答にたどり着くまで「ねばる」ことができるようになります。

また後半には、もう一つの柱である、『数の感覚』につながるゲームをしました。秋学期にはおはじきを使って20までのイメージを作り上げることをしましたが、次に意外と1年生の間に定着しきれていないのが、数の順序(オーダー)です。1~9までは数える機会が多いのでほぼ完全に把握していますが、大きい数では機会が少ないだけに怪しく、13が一体どれだけ大きな数か? たとえば6にあといくら足せばその数になるか? (『7なら

べ』で言えば、何枚離れているか?)といった数の感覚は、プリントの上でよりも生活の中で鍛えなければなかなか身につくものではありません。

そこで今学期はトランプをよく使いました。トランプには数字が書いてあり、また絵札の数は10を越えるので、容易に $9+12$ 、 $11+10-4$ といった計算に応用できます。たとえば、『数合わせゲーム』では、トランプを散らしておいて、私が「10」と言うと、足し算でも引き算でもいいので、2枚か3枚を使って結果が10になる組み合わせを探すことをします。J Kを0と最初に決めておけば、 $10+JK$ も10になります。面白い混乱が起こるのは、場に絵札しかない時に「1」のような小さい数字を言った場合です。一瞬「え? ない」と思いますが、引き算に思い当たると、 $13-12$ など無数に作れるわけです。さらに「0」と言うと、同じ数を2枚探せばよいことになります。これも算数的な頭を作ります。

また『スピード』というゲームがあります。これは時間を競うことと、数が上り下りする点で、より積極的に数の順序を頭に叩き込むのに有効です。授業でしてみたところはじめての生徒が多かったので特に反応が新鮮でした。(T君は「面白いのを教えてもらった!」と喜んでいました)。

ほかにも『ブラックジャック』(2枚か3枚でなるべく21に近づける遊び)があります。またもっと数の大きさが意識できるようになれば、『51』(5枚の手札を入れ替えながら同マークの合計を51に近づけ、異マークの数があると減点される遊び)という発展形があります。ことばのクラスでした『ぼうずめくり』も、「何か分からないけれど触れた」という記憶が、百人一首を本格的に知る時の支えになることが期待されるように、算数でもそれを使って遊ぶことが、前向きに取り組めるようになる必要条件ではないかと考えています。

(文責 福西亮馬)

『かず』 2年生(水曜2限)

担当 浅野直樹
岸本廣大

秋学期まではパズル的な要素が比較的強かったのですが、今学期は「かず」クラスらしく数字を多く扱いました。学校で九九や二桁の足し算・引き算を習ったこともあり、生徒たちの側から計算をしたいという声が出ました。そうした声を聞くことができたのも昨年度このクラスを担当されていた福西先生と上尾先生、学校の先生や幼稚園の先生、あるいは保護者のみなさまが「かず」の楽しさを伝えてくれたおかげだと思います。楽しみながら自主的に学ぶこと以上に効果的な学習方法はないことでしょう。

このクラスでの教材として普通のドリルのような計算問題を作ってみたこともありましたが、方々から「簡単だ!簡単だ!」と言われてしまいました。そうするとこちらも負けてはいられないので普通のドリルに少し手を加えて難しくしたりもしました。それでも解かれてしまうのがうれしくもあり、少し悔しくもあります。

ドリルだけでは飽きてしまうので計算力が問われるパズルも出題しました。具体的には、条件を満たすように1~6の数字でピラミッドの空白を埋める足し算ピラミッドと、タテ・ヨコ・ナナメの4数の合計が等しくなるように1~16までの数字を全部使ってマス埋める魔方陣です。魔方陣はある法則に気づくと取っ掛かりはつかめます。しかし実際に空白マスを埋めるとなると相当な計算量が必要になります。余白で一つずつ丁寧に筆算をする人もいれば、使い得る数字をすべて書き出してからすでに使ったものを消していった推測する人もいました。

みんながあまりによくできるので簡単に解き終わられてしまわないように、次は二桁の足し算・引き算の百マス計算を用意しました。解き終わってから指定された数字のマスを色を塗ると文字や絵が浮き出るという仕掛けつきです。よく考えるとまだ習ったばかりの二桁の計算を合計で二百問も解くことになります。大人でも嫌になるくらいの分量です。さすがに一時間では終わらず持ち越しとなりました。そこで、どうせ計算練習をするのならインド式計算術を取り入れようと考えました。

計算をできるようにすることが目標だとするならば、そこへ至る道はいろいろあります。着実に筆算で解くのが得意な人もいればインド式のように工夫するのが好きな人もいます。時にはパズル的に遊ぶのもよいでしょう。そうして楽しみながら継続的に取り組むといつの間にか取り立てて意識せずとも計算ができるようになっていくものです。

(文責 浅野直樹)

—かず2年生—

この冬学期、様々な取り組みを浅野先生と共に行ってきましたが、そこで感じたのは、子供たちの能力の高さと、それを引き出す難しさでした。すこし反省めいたことを含めながら、冬学期の出来事について振り返ってみたいと思います。

この冬学期には、「上級魔方陣」や「たし算ピラミッド」、「絵(字)のかくされた百マス計算」や「インド式計算術」など、春・秋学期に比べて、計算に比重を置きつつ、子供たちが飽きずに積極的に取り組んでくれるような問題を用意、実際に取り組んでもらいました。それぞれの問題のルールはブログに譲るとして、どのルールも小学2年生にとってはやや難しめでした。実際、個々の子供たちにルールを説明し直す場面もありましたが、

一旦理解するや否や、子供たちは自らの頭をフル回転させて、問題に取り組んでくれました。そのほとんどの問題に対して、答えをしっかりと導き出していたことは、子供たちの元々の能力の高さを示しているでしょう。

しかし、全てが順調だったわけではありません。寧ろ子供たちがあまりに順調に問題をこなしてくれたからこそ、教える側として、あれもやらせたい、これもやらせたいという欲が出てきたのでしょうか。私の中で次第に密度の濃い計算へと方向性がシフトしていきました。さすがに計算に食傷気味だった子供たちは、そういうプリントに最初は控えめに、そして時には強く拒否反応を示しました。最初は、その拒否反応の意図を深く考えずに、とりあえず問題に取り組んでもらえるよう諭していました。しかし、その拒否反応の裏には、子供たちなりの論理があって、それに基づいて私たちの用意する問題に反応してくれているのだということに、後になって気づかされました。私はいつも気が付くのが遅すぎるのですが、子供たちの能力に対する私の期待が先行しすぎて、逆にその能力を押し殺していることがあったのだと思います。そういう時に、浅野先生が、別の面白いアプローチを提案してくれたり、上手い助言を与えたりして、助け舟を出してくれました。こうしたところが共担の利点であり、私だけでなく、子供たちも楽になったのではないのでしょうか。

さて、逆に今学期、子供たちの力が十二分に発揮されていたのは、協力作業においてだったように思います。例えば、百マス計算では、隣同士の二人の子供さんが、一列解き終わるとその列の解答を一つずつ比較し、互いに答えが違くと、どちらが正しいのかを二人で一生懸命考えている様子が窺えました。それ以外でも、石取りゲームでは、クラスの子供たち全員で私たちに対する必勝法を考えてくれていましたし、何人かは他の人のゲームを見て、必勝法に気づくことがありました。以上の取り組みでは、協力作業こそが、個々人の本来の能力を引き出していたのであり、これこそ山の学校で学ぶ「かず」のクラスの楽しさなのだと思います。このことを浅野先生や子供たち自身に気づかされ、私にとっても意義深いクラスになったのが、この冬学期の出来事でした。

(文責 岸本廣大)

『かず』 3年生A(火曜2限)

担当 岸本廣大

冬学期、このクラスでは恒例の迷路や間違い探し(同じもの探し)に加えて、新たに文章題に集中的に取り組みました。この山びこ通信では、文章題を軸に展開された子供さんと私のやりとりについて、書いていこうと思います。

文章題で子供さんが苦手になっていたのは、たし算やひき算、かけ算といった計算方法のうち、どれを式として用いるのか、という点でした。つまり、問題に表れる数の関係性を把握することが、課題だったのです。当初私は、図などを用いながら、数の関係性を考えてもらおうとしましたが、子供さんはそれとは別の方法で、自らの課題を克服しようとしていました。その方法とは、ドリルの単元から、このページで用いる計算方法を判断するという方法でした。例えば「あわせていくつ?」という単元では「たし算」、「のこりはいくつ?」という単元では「ひき算」といった具合です。この方法は、単にドリルを解くだけなら有用で、上手くすれば数の関係性を理解せずとも、解けてしまいます。その点では、ドリルの単元に着目した生徒さんは要領がよいのでしょうか。いつも迷路やパズルのルールを読むときに、「ただし、」で始まる条件文のみを読むという姿勢にも、これと通ずるものがあります。

ただし、実生活に即して考えてみると、こうした方法のみに頼ることが非常に危険なのは、誰もが気が付くことでしょう。というのも、実生活において、ドリルの単元なるものは存在せず、自分で関係性を把握することが、求められているからです。そうした理由から、私ははじめ、単元を読まないようにと指示を出していました。しかしその後、ドリルを渡して半ば強制的に勉強させている上に、更に単元を見ないという制約を課するのは、教える側の身勝手な論理であるようにも思えてきました。現に子供さんはそれに対して「えーっ!」と反応し、控えめにも拒否を示していました。

そこで私は、寧ろ単元を見ることを通じて、数の関係性を把握してもらおうと画策したのです。つまり、単元を見た上で用いる計算方法を判断するのは容認しますが、しっかり問題文を読んでもらい、どの部分が単元と同じ意味を表しているのか、すなわちどの表現から単元の示す計算方法が引き出せるのかを子供さんに尋ねることにしたのです。これは、解答を見た上で、問題文を改めて理解しなおすという過程に似ています。これを繰り返すことで、単元を見ずとも、問題文を読むことで、どの計算方法を用いるべきかを判断することに慣れていってもらうのです。まだ定着していませんが、最近子供さんからの「これはひき算?」との質問が、次第に「これはひき算でしょ」という確認へと変化しているように私は感じます。この変化は一見小さなステップアップですが、子供さんにとっては、問題文から式を立て、答えを導くという文章題の基本が定着しつつあるという点で、大きなステップアップです。そして次のステップは自分で問題文を作れるようにすることです。そこに至れば、「算数=かず」がダイレクトに実生活に寄与することを実感できるでしょう。それこそが、「かず」を学ぶ大きな意義の一つになるのではないのでしょうか。

(文責 岸本廣大)

『かず』 3年生B(水曜2限) 担当 上尾真道

毎年この時期になると一年の過ぎる速さについても驚かされますが、今、今年度を振り返ってみると、こうしてあわただしく過ぎたように思える一年の中でもクラスの子供達がいっしょに成長していたことに改めて気づかされます。昨年の春、このクラスに集まった元気な男の子達は、やはり今でも相変わらず元気いっぱいですが、勉強の時間に見せる集中力や、落ち着いた様子など、やはり一年前とは違った、成長した姿を見せてくれてもいます。一時間の授業の中でも、自分なりの勉強のペースやリズムをだんだんと掴めるようになってきました。

この冬学期は、ひとつのテーマを定め、それと関連した課題を用意し、やってもらってきました。そのテーマとは、たしざん・ひきざんとは水準の異なるものとして、かけざん・わりざんの水準を理解してもらうということです。そこで、なるべくかけざん・わりざんの二つを切り離さずに考えることができるような課題を設定し、取り組んできてもらいました。まず用意したのは、学校の勉強の進み具合とはだいぶ異なりますが、「比」の考えに馴染むための課題です。「比」の考えを学ぶことは、かけざん・わりざんの本質を掴むために、非常に重要であると私は考えています。もちろんこの授業で、かけざん・わりざんの本質などと難しいことを言うわけではありませんが、ゆくゆくは数学や自然科学について勉強するようになる子供達にとって、この「比」の考えに親しんでおくことは、きっと肥やしとして役に立つのではないかと考えています。

実際の課題には、例えば、スウィフトの『ガリバー旅行記』にちなんだものなどがあります。「人間ガリバー君と比べると、巨人のジャイアン君は何でも2倍、大巨人のヒガント君は何でも3倍となります。彼らの色々な持ち物について、その大きさや個数を比べてみましょう」というような問題です。これまでたしざん・ひきざんを使って大小を計ることに慣れてきた子供達にとって、かけざん・わりざんを使う大きさ比べの仕方には、最初、なかなか戸惑うところがあったようです。それでも、子供達は自分で頭を悩ませて、自分なりの理解を獲得していききました。

一年間子供達を見てきて今思うのは、まさに彼らの可能性のことです。先週詰まっていたことが今週できるようになる、こういうことが子供達にはよく起こります。そこかしこにブレイクスルーのチャンスがあるようです。しかし、こうしたチャンスは、積極的な挑戦によってしか切り開かれないようにも思います。教えるということは、こうした挑戦を陰で支えることでもあるのだと、この一年の子供達とのふれあいが私に教えてくれました。

(文責 上尾真道)

『かず』 3・4年生(金曜2限) 担当 上尾真道

このクラスは現在、山の学校でもいっとう山の上に近い教室で授業を行っています。冬ともなれば夕方でも周りはすっかり暗くなっているのですが、子供達はいつでも元気いっしょに坂道を登ってきて、教室の扉を明るく開くのでした。さて、今年の冬学期の方針は、かけざんとわりざんに慣れていくことでした。ただの計算の練習だけでは気づきにくいことですが、かけざんやわりざんは、そもそも、合理性ということと関連する重要な思考方法の一つです。ただの九九の練習としてだけではなく、ひとつの思考方法としてのかけざん・わりざんというものに気づいていくことを裏のテーマとしながら、この授業では、それに即したいくつかの課題を出してきました。

ひとつには「比」という考えを導入することが授業では試みられました。最初の時間には、地球上での陸地と海の面積の話などをしながら、「比」について一緒に考えました。またその後には、「持ち物」比べと題し、二人の架空の人物(太郎君と次郎君)の持っている具体的な物の個数の「比」を、簡単な数字で表すという練習もしました。こうした課題をやっていると、子供達のほうから「じゃあ今度は、こういう持ち物で比べてみたい」「車の台数!」「土地!」などと言って、どんどんと具体的な提案を出してくれたことが印象的でした。私が用意していたものに子供達の提案が加わることで、授業がより懐の深い、味わいのあるものになったのでした。

こうしたことのほかにも、もう少し実践的な面から、掛け算と割り算の双方向性を理解するための課題も用意しました。ひとつとして、行、列がそれぞればらばらになった九九の表を、少ない手がかりから推理して埋めていくというものがあります。例えば、あるマス目に「36」とあり、それが「6の段」の行にある、という情報から、そのマス目のある列が「×6」であるというように判断します。ここでは割り算の考えをしているわけです。このようにして、行・列が何の段なのかを推理し、表の中身のマス目を埋めていきます。最初にこの課題を提示したときは、やり方に少し戸惑っていましたが、今では、みんな簡単なものであればものの10分ほどで解いてしまえるようになりました。

春からはまた、勉強に関わることであれ何であれ、知性を刺激する数多くの新たな出会いが子供達を待っていることと思います。一年間行ってきたこの授業が、そうした出会いをより豊かなものに変えていく助けとなってくれればと切に願っています。

(文責 上尾真道)

『かず』 4年生(水曜2限) 担当 福西亮馬

このクラスでは、理詰めで考えるのが得意なSちゃんに、ぜひその才能を伸ばしてもらいたいと考えて、高学年用の『論理パズル』をしています。毎回の問題とそれに対するSちゃん的答案は、ブログに掲載していますので、ぜひそちらをご覧ください。非常にしっかりとした答を書いています。



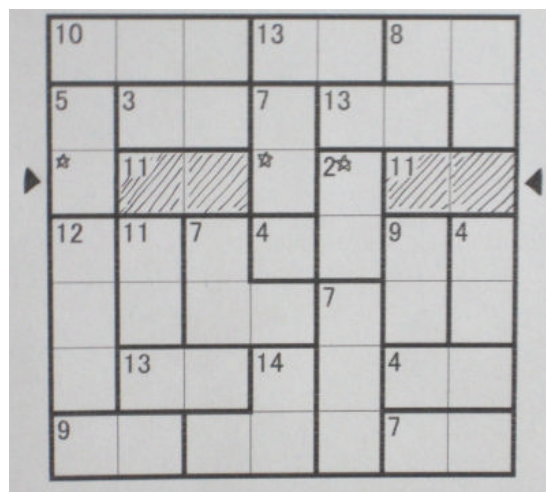
またSちゃんは、以前『勉強会』で2時間かけて1問について考えたことがありました。『足し算パズル3級』の7×7マスの問題です。私もそばで拝見していましたが、どう途中の仮定を変えてみても、最後の数マス目ですら矛盾が生じてしまって、とうとう時間内に解けませんでした。そこで、どうせなら解いて「やった!」と言ってほしいので、いつか授業に持ってくるように伝えました。

それをこの間持ってきてくれたので、コピーして最初から考えなおしてもらいました。その方が実際解きやすいからなのですが、心理的には壁があったかもしれません。しかしSちゃんは嫌な顔をせず真剣に取り組んでくれたので、頼もしいと感じました。

その時役に立ったのが、以前の解きかけの答案でした。その欄外には「5 | 14・23・16・27」といった、数の和・差のパターンが網羅された「数表」が書き込まれていたため、それを手がかりに活用したのです。

これもまた山の学校のブログに詳細を書くつもりですが、Sちゃんの論理的な解き方には、本当に4年生かと疑うぐらい舌を巻きます。前よりもさらに慎重に、確実なこと(必然)を積み重ねていって、とうとうこの問題を解くことができました。Sちゃんは思わず、「はあ、疲れた…」とため息をもらっていました。おそらく長い間の懸案が果たせた思いだったので、本当によかったと思います。

その後で、今回役立った「数表」を別の紙に書き写して整理してもらいました。いつでもそれを見られるようにするためです。それを片手に残りの3級の問題にもいつか挑戦してください。今なら2級の問題にも十分手が届くはず。ただ、1問1問が手ごわくなっているため、「ゆっくり急げ」だと思います。



Sちゃんが解いた問題(『足し算パズル3級』)

第3行目のハッチングされた「11」のマスに注目して下さい。Sちゃんの「数表」によれば、11の可能性は47か56しかないことが分かっています。そして11のマスが同じ行に「2つ」並んでいるのであれば、どちらかが47で、どちらかが56だと分かります。これが探しに探してやっと見つけた「カギ」でした。これを使って、「☆のマスには、4567以外の数、すなわち123が入る」ということを発見したのでした。

(文責 福西亮馬)

『かず』 5年生(木曜2限) 担当 福西亮馬

このクラスでは、単元別に小分けにした『巻物』、数学的なパズルを集めた『扉の書』、幾何学的な問題を扱った『工作』をしています。

『巻物』とは10枚ほどの計算プリントを束にしたものことで、男の子が夢中になってくれそうな忍者のそれをイメージしています。H君は『扉の書』も合わせると、かれこれもう30巻を修めてくれている、たいへんな努力家です。しかも次々と「今度は『～の巻』作って〜!」とリクエストを出してくれるので、彼と一緒にいる時間は、本当に教える者として幸せに感じます。

『工作』では、『ムービングキューブ』『正二十面体』『ヘキサフレキサゴン』『メビウスの輪』を作りました。『ムービングキューブ』というのは、立方体をつないでギミックに動く構造物のことで、H君はその作り方を授業で知るなり早速家でも作ってくれました。しかも自らの発案で、得意の折り紙で作った正6面体9個を組み合わせた作品です。単純に計算しても $6 \times 9 = 54$ 個の部品が要るので、大変苦労したはず。それも見事なできばえで、写真を撮っておきたいと思ったほどでした。

次の写真は、『輪』における、H君のレポートの一部始終です。むしろ論文と言ってよいほどの完成度の高さに、これもまた驚かされました。

<H君の予想>

1、3、5…(奇数)回ひねった輪は、半分に切ると二つに分かれる。

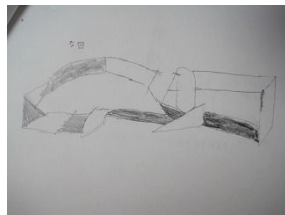
<検証>



1回巻きと2回巻きのスケッチ



3回巻きのスケッチ



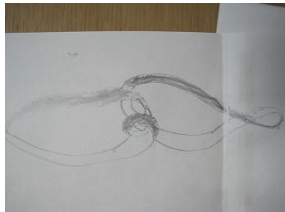
5回巻きのスケッチ



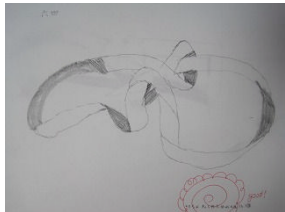
7回巻きのスケッチ(ここでも新しいことに気付きました)



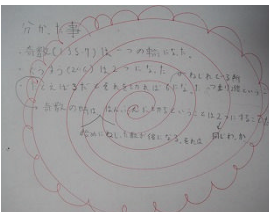
2回巻きのスケッチ(書き直し)



4回巻きのスケッチ



6回巻きのスケッチ



結論(最も大事な部分。よく書けています)

普通なら1回・3回ひねりの輪だけを調べて「できた!」と終わりにするものですが、そこでH君はさらに労力を注いで、1~7回ひねり(1回=180°)のすべてについて調べ上げてくれました。大変な意欲を感じます。特に奇数だけでなく、偶数についても調べ、予想が奇数についてだけ成り立つことを確認できたことは重要な結果です。また偶数についても「(偶数回ひねりの輪は)半分に切ると、ひねりの数が2倍の輪が1つできる」「なぜなら半分に切るということが2倍にすることだから」という新しい事実も発見してくれました。実際に費やした時間もさることながら、それに見合うだけの豊富な結果をよくまとめてくれました。H君の処女論文だと言ってもよいくらいに思います。

計算ドリルにせよ、パズルにせよ、そして工作にせよ、H君はすべてに一貫した『ねばり強さ』を見せてくれます。私は、彼に『愚直』という言葉を送りたいと思います。また彼は自分で自分に満足を作り出せる生徒で、帰り際でも「ありがとうございました」と、私以外の先生と顔を合わせても、にこやかに挨拶をしてくれます。それが一層彼の美点を引き立たせているように思います。

(文責 福西亮馬)

『かず』 5・6年生(金曜2限) 担当 高木 彬^{あきら}

ドリルと、パズル/工作の、両輪で進んできたこのクラスも、気がつけば、はや一年です。

秋学期の中ごろから、前学年までの復習が充分できた生徒は、順次、現在の学年のドリルに移りました。現在の学年のドリルとなると、まだ習っていない単元もふくまれます。無理に解くと、間違いを重ねて自信を失ってしまうおそれがあるので、そのページは空けておいて、基本的にはすでに習った箇所を復習することに徹しました。したがって、前学年のドリルに取り組んでいたときと、復習に徹するという意味では、なんら状況は変わらないのです。しかし、生徒たちのなかには、「はやく今の学年のドリルに進みたい!」という気持ちが強かったようです。私は、そうした傾向を、最初は、目新しさにはしっているだけなのではないか、あせっているだけなのではないか、と考えていました。ところが、あるときから、そうではないと思うようになりました。それは、新しく五年生のドリルをお渡ししたさいに、これまで取り組んできた四年生のドリルの残りを自宅で自主的にすべて完了させて持参してくれてきたM君の姿を見たときからです。M君は、そのドリルの間違い直しも、残らず終わらせてくれました。もしも目新しさにはしったり、あせったりしているだけならば、こうした姿は見られないはずです。つまり、彼らが現在の学年のドリルに進みたいという気持ちを持つことは、なにより、「もっとできる!」という、強い自信のあらわれなのです。そしてそれは、前学年の復習に地道に取り組んできた賜物です。

四名の生徒は、それぞれが着実にドリルを進めてきました。最近では、M君が、自前の計算ノートを用意して、問題をひとつずつ丁寧に解いてくれています。するとそれを見たRちゃんも、紙を束にして計算ノートを作って問題に取り組むようになりました。ときには苦手な問題に遭遇して難しい顔をすることもりましたが、それでも投げださずに真剣に取り組んでこられたのは、自信の根っこがしっかりしていたからだと思います。

パズルや工作は、隔週交替で取り組んできました。マッチ棒を使った図形パズルでは、ほかに取り組んでいる

まちがいさがしや迷路とはちがい、「こうすれば／時間さえかければ、必ず答が導ける」という正攻法が存在しないため、一つの問題を解くのにどのくらいの時間がかかるか分からないこともしばしばあります。しかし、それが解けたときの喜びを知った後では、実際に手でマッチ棒を動かしながらあらゆる可能性を試行錯誤していく時間そのものが、楽しいと感じられているようでした。あるときAちゃんが、「マッチパズルのときは、時間がすごい短く感じる!」と言っていました。「こんなんもあるで!」と言って、自宅から、マッチパズルを紹介した冊子を持ってきてくれたこともあります。またあるときは、Rちゃんが「自分でもパズルを作りたい!」と言ってくれ、みんなでマッチパズルやまちがいさがしなどを自作する展開になったこともありました。

方眼紙に展開図を自分で描いて立方体を作っていく工作の時間では、Mちゃんが、毎回、説明書とにらめっこしながら、丁寧に、着実に、線を引き続けてくれていたことが、非常に印象的でした。彼女は、一步一步すすんでいたらいつのまにか膨大な距離を踏破していた、というタイプの努力家だと思います。いま私がこの文章を書いている時点で、彼女は、立方体の完成まであと一息、といった地点にいます。この立方体が完成した、この問題が解けた、この単元をマスターした、この学年を終業した、という、数かぎりない中継地点を越えて、どこまでも自分の足で歩きつづけていってほしいと願っています。

(文責 高木 彬)

『かず』 6年生(月曜3限)

担当 福西亮馬

いよいよ小学生の時期も残りわずかとなりました。このクラスのU君とT君とは長い付き合いで、1・2年生の頃から(授業数にすれば200回近くになります)、実に多種多様な内容を通して、「自分の頭で考えること」を中心に取り組んできました。またその考えを「書いてまとめること」にも意識的に力を注ぎできました。2人とも、私の求めんとすることには毎回十二分に応じてくれます。また私自身、真摯に取り組む彼らの姿からは大いに触発されています。彼らには、算数を教える間柄というよりは、「思索の時間を共有している仲間」だとさえ感じています。

今学期は、最後を飾るテーマとして、有名な『メビウスの輪』と『クラインの壺』、そして『ハノイの塔』を取り上げました。前の2つは「次元」(U君が特にこれに興味があったので)という幾何学的な話題で、後者は「数論」という純粋数学の分野です。それらについて彼らがどのように考えたのかは、ブログに詳細を書いていますので、併せてご一読いただければ幸いです。

さて、彼らの取り組みでいつも感心するのは、 $n=1, 2, 3\cdots$ と、前とほとんど同じ実験を繰り返す必要がある場合でも、「次はどうなるんだろう?」と好奇心の赴くままに、飽かず手を動かして確かめてくれることです。とりわけ『ハノイの塔』を考えた時にそのことを著しく感じました。

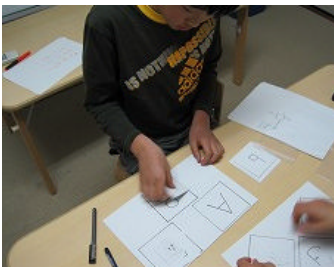
一方その経験から、何らかの法則を取り出してレポートに書いて「普遍化する」という作業にも積極的に取り組んでいます。それはおそらく去年のうちでは難しかっただろうと思うのですが、今ではさすが六年生だと感心する出来事の一つとなっています。残すところあと数回ですが、彼らとの思い出を最後まで大切にしたいと思います。



ひねった輪を切ると…(『メビウスの輪』)



「4次元の穴を通過して…」(『クラインの壺』)



『ハノイの塔』。「まずは3段目から…」「あれ、どっちにおけばいいのかな?」 関数電卓を使って計算

結果をまとめています

また来年度には、私の担当で『ユークリッド幾何』『ロボット工作』という中学生クラスがあります。よかったら次のステージと思ってそちらへも参加してください。私も楽しみにしながら待っています。それまでの間ぜひ基礎的な力も蓄えておいてください。

(文責 福西亮馬)

『英語の基本』 中1年生（水曜3限）

担当 岸本廣大

私が、このクラスを受講してくださっている生徒さんと初めてお会いしたのは、去年（2009年）の1月末から開講されたプレ英語でしたから、この冬学期を終える頃には、一年以上、二人で英語について学んできたこととなります。中1という非常に重要で繊細な時期の生徒さんを担当して、多くのことを考えるようになりました。今回の山びこ通信では、その考えについて、冬学期だけでなく、一年を振り返って述べていこうと思います。

思えば、最初はアルファベットから始まりました。小学校で既習だったため、スラスラと読むことはできましたが、大文字や小文字を書くのは、手間取っていたのを覚えています。それが今では、文字数にすれば数百、あるいは千近いアルファベットが織り成す単語、英文を読み書きしているのですから、その成長ぶりには驚かざるを得ません。

また、英語の書き方も、当初は一つの単語なのに、一文字一文字が離れていたり、逆に二つの単語の間にほとんど空白がなかったりと、正直に言えば読みづらいものでした。こうした書き方も、次第に変わっていき、冬学期に至っては、私が読んでも違和感の無い英文を書いてくれるようになっています。

文法に関しては、はじめからよくできていたように記憶しています。否定文や疑問文の作り方・答え方に始まり、複数形や三単現の変化、疑問詞を持つ疑問文や現在進行形、助動詞や過去形といった文法事項も、それほど手間取ることなく吸収してくれていました。春学期のうちに伝えた、品詞の説明、英文の並び方の原則が、この冬学期においても、生徒さんの中で生かしていることが、やはり一年を通じて学んできた成果の一つでしょう。

他にもいろいろと成果はありますが、つぶさに言及しては紙幅を大幅に超過してしまいます。寧ろそれよりは、私も含めた反省点を述べていくことも意義のあることでしょうか。一つ大きな反省点を述べるとすれば、それは単語に関わることです。このクラスでは、春学期から単語の確認をしてきましたが、その単語の確認が上手く生徒さんの中で生かされていない、寧ろ単語の確認自体、生徒さんの復習の対象となりにくい様子が見られたのです。地味ではありますが、単語に数多く触れておくことの重要性は、英語に携わった人、特に苦勞している人なら身に染みていることだと思います。なればこそ、中1という重要な時期から、単語に触れていって欲しいという意図が私にはあったのですが、一年を通して行ったわりに、それが空回りしていたことは否めません。生徒さんのモチベーションの問題もあるでしょうが、私の考え自体が間違っている、またはあまりに事を急いでいたのかもしれない。より中1の生徒さんに合った単語の学習が求められているのでしょう。

以上の反省点もありましたが、この一年で生徒さんが英語に関して大きく成長したことは、私が保証しますし、それは紛れも無く生徒さんの力によるものです。そしてこのクラスは、その力を存分に発揮してもらえるように、サポートしてきました。今の生徒さんの力は、そうした取り組みにもよるのだと私は思っています。

（文責 岸本廣大）

『英語の基本』 高1年生（水曜4限）

担当 岸本廣大

このクラスでは、冬学期に様々な視点から英語に触れてきました。その視点は大きく3つに分けられます。その一つであり、春学期から継続している単語の確認については、直近の山びこ通信で述べたとおりです。また第2の視点である文法は、扱う内容が分詞や仮定法に移行しました。ただし、単に構文を覚えるのではなく、基本となる構文から何故こうなるのか、文の構造や要素を踏まえて考えてもらいながら、取り組んでいます。こうした取り組みは、春学期の山びこ通信（6月号）で触れた原則から一貫しています。

さて、今回の山びこ通信では、第3の視点たる長文の読解について、少し書き連ねてみようと思います。この長文の読解は、以前からそれが苦手だという生徒さんの要望に応じて、冬学期から本格的に取り組み始めたものです。新しい取り組みとはいえ、その根本にあるものは、前述の二つの視点と共通です。それはつまり、単語の意味や文法的な知識を用いることです。つまり長文読解とはそれを用いて、単なる語の並列から意味そして内容のある文章を読み、自分の中で紡いでいくことなのです。その観点からは、長文読解とはこれまでの取り組みの応用、発展と捉えられるでしょう。

他方で長文読解には独自の味わいというものが 있습니다。それはなんととっても、ストーリーがあることです。単語や文法を扱う問題では、えてして英文の内容よりも語そのもの、あるいは語の並びそのものに、

回答者の意識は集中します。しかし、長文読解では、細かな単語の意味や文法事項よりも、それらが表す内容をストーリーに沿って読み解くことが重要とされます。これは、私たちが日常用いる言語（この場合は日本語）への接し方とほぼ同じです。つまり、記号でなく、内容を伴った言語として英語に接することができるのが長文の独特の味わいといえるでしょう。

このような長文と、以前から取り組んできた単語や文法の関係は非常に密接です。まずもって、前述したように長文の読解には基本となる単語や文法が必須です。しかし、それだけではありません。単語や文法のみが長文読解に寄与するのではなく、逆に長文の読解が単語や文法の理解に寄与することもあるのです。例えば、ストーリーの流れを把握し、それに沿って、より適切な単語の意味や文法事項を適用できることがしばしばあります。つまり、長文読解には必ずしも完全完璧な単語や文法の知識が必要なのではなく、むしろストーリーのある長文の読解を通して、自らの単語や文法の知識を拡充していくことが可能となるのです。単語と文法、それと長文という視点は、どちらが基礎でどちらが応用という括りでのみ語られるべきものではないでしょう。寧ろ互いに互いを補完しあいながら、英語に対する理解全体を高みへ押し上げていくものと認識すべきではないでしょうか。

そして英語に対して様々な視点があることから、英語のみならず、言語というものには多様な面があり、いろいろな方向からアプローチができるのだという、その在り方を生徒さんに感じ取って欲しいと思うのは、少々飛躍のある押し付けではありますが、私の望んでいることでもあるのです。

(文責 岸本廣大)

『英語の基本』 高2年生 (水曜3限) 担当 上尾真道

この高校英語の授業では、この冬より特に新しい試みとして、Ursula K. Le Guin の小説 “A Wizard of Earthsea” を読んでいます。日本では『ゲド戦記』としておなじみのこの小説は、少年少女向けとは言え、その深いテーマ性によって世界中に多くのファンを持つファンタジー小説です。

授業でこのような本読みを行おうと決めたのは、まず第一に、英語というものをただの暗記の対象のみに留めるのではなく、コミュニケーションツールとしての「英語」というものに触れること、そして「英語を使用する」ということに参加するということを目指したからです。これは英語を勉強する上で、決して瑣末な問題ではないと私は考えます。最も大きい理由は、モチベーションということになるでしょう。試験で良い点を取るというモチベーションは、試験が終われば全てが終わるというのであれば構わないのですが、我々が今後人生全般を通じて多かれ少なかれ英語と関わらざるをえない以上、英語学習の決定的な動機とはなりません。英語とのより積極的な関係を作るということが、長い目で見るなら、非常に重要なことなのです。第二の理由としては、英語にもっと総合的に、包括的に触れるということの必要性があります。試験範囲に区切られた英語の学習は、どうしても断片的にならざるをえません。しかし実際の英語力とは、常に総合的なものであり、いろんなことを知っているということが重要となります。その点、本を読むことは、いくつもの文法事項が混ざり合う、めくるめく渦のなかに飛び込むことであり、様々な表現の有機的なつながりに肌で触れることのできる経験であり、英語の総合的な力が鍛えられます。

授業では、まず家で予習をしてもらいます。これについては、少なくともまず、英語のテキストにひるまずに、英文を目で追うということが大事です。英語を読みなれてしまうと忘れがちですが、まったくちんぷんかんぷんの文字列を見ることは眩暈のするようなことです。だから、まずはちゃんと目で追うこと、そしてできれば声に出して読むことが大事です。授業では、そうして読んでもらった箇所から、知らない、分からない単語を取り出し、その意味について確認します。そうして一度、声に出して読み、それから文章の意味を確認していきます。このとき、日本語訳を作るということには特にこだわりません。ストーリーが頭にきちんと入っているかどうかを重視しています。

こうした作業は、より大きな英語の力の樹が育つための土台作りの意味を持っていると私は考えています。焦らずに長く粘り強くやっていくことが大事な勉強です。

(文責 上尾真道)

日本語の読み書き

中学生・高校生
生徒募集中!

毎授業、テキストを少しずつ読破しながら、それに基づいた作文、小論文、討論を行います。こうした「考えることを文章によって表現する」練習が、論理的思考力の鍛錬になることは言うまでもありません。今も、そして将来も必要不可欠となる「考える力」を磨きましょう!

『英語の基本』 高1・3年生（水曜3限）担当 浅野直樹

このクラスとちょうど重なり合うわけではありませんが、まずは英語読書会の取り組みを紹介させていただきます。今年の一月から英語読書会の企画として『ハリー・ポッターと賢者の石』を有志で読み始めました。この原稿を書いている時点ではまだ一回しか開催していないので、どのような形に落ち着くかは流動的です。

そもそもの始まりは上尾先生のクラスで『ゲド戦記』を読んでいると聞いたことでした。それならこちらのクラスでも同じような取り組みができないかなと考えを巡らせて、ハリー・ポッターを読んでみるのはどうかなと思いつきました。私はそれまでにこの作品を日本語でも読んだことがありませんでしたし、映画も観たことがありませんでした。そのようなまっさらな状態で読み出すとこれがおもしろかったのです。どうせならクラスの枠を越えて参加してもらいたいと思い、別枠で実施することにしました。

前置きが長くなりましたが、このクラスについても多読の重要性を強調したいです。一通りの文法を身につけると、辞書を使いながら時間さえかければおおよそどのような英文でも読めるようになります。しかし慣れるまでは相当な時間がかかります。1ページを読むのに1時間くらい平気がかかったりします。中学や高校でのリーディングクラスの進度はそれくらいですね。そのようにして英文の構造を厳密に把握しながら読むことも大事です。でもそれだけではいつまで経っても英語をスラスラと読めるようにはなりません。大学生や社会人になるとまとまった分量の論文や本、ウェブページなどを短時間で読むことが求められがちです。この断絶を埋められるかどうか、大人になってから英語が得意と思えるかそうでないかの分かれ目になっているのではないのでしょうか。

英語をスラスラと読めるようになるためには多読が必要なのですが、やみくもに読めばよいというわけではありません。不正確に読んでは元も子もありませんから。一通りの文法は理解できているということを前提として、左から右へと切るべきところで切って読むことができれば内容がずっと頭に入ります。そのためには音読も有効です。もう一つのコツとしては、接続詞などに注目しながら論理構成を意識すると英文が読みやすくなります。英語では日本語と比べるとはるかに論理構成が見えやすくなっています。

近年ではセンター試験を始め、大学入試でも多量の英文を短時間で読むことが求められる傾向にあります。あまりにもスピードばかりを強調するのもおかしな話ですが、正確にかつ速く読めるに越したことはありません。

（文責 浅野直樹）

『数の基本』 高2年生（水曜4限）担当 浅野直樹

冬学期の報告をする前に秋学期と春学期の『山びこ通信』の内容を振り返っておくのも悪くはないでしょう。秋学期の記事では点と直線の距離の求め方を例にとり、数学の本質を理解することの楽しさを伝えようとなりました。他方で春学期の記事では計算や公式の運用の地道な反復練習の重要性を強調しました。以前より繰り返し申しておりますように、数学的な本質の理解と計算や公式の運用練習はバランスが肝要です。本質の理解だけが先走ると思わぬ形で足元をすくわれかねませんし、計算や公式の運用がいくら正確にできても大きな指針がないと道に迷ってしまいます。

そのバランスを取るためには現状を知る必要があります。そこでテストの出番です。「テスト」を文字通り受け止めると自分の理解を試すものであり、評価をするための基準ではありません。したがって一学期に二回だけしか行ってはならないなんてことはありません。学校のテストであまりできなかったところがあれば改めて勉強をし直してからもう一度テストしてみればよいのです。それでできるようになっていけばよいですし、またできなかったなら反省をして対策を考えたともう一度テストしてみるだけのことです。そうしているうちに自分はどこが理解できていてどこが理解できていないのかだんだんとはっきりしてきます。このクラスでも小テストを繰り返すことで理解度がはっきりとしていく過程を目の当たりにすることができました。

学校のテストとは別に模擬試験を受けることもあるでしょう。大学入試を考えると表面的な数字ばかりが気になるかもしれません。しかしその結果はあくまでも現時点でのものです。大学入試を考えればこそ、答案の中身を見直して実力をつけるように努めるべきです。苦手な分野はないか、記述のしかたが下手で減点をされていないか、時間が足りていなかったのかなど、考慮すべき点はたくさんあります。言い古された言葉ではありますが、「答案は宝物」です。

このクラスでは私が言うまでもなく各自でテストをうまく活用してくれていました。数学と真摯に向き合うことで「己を知る」という姿勢を身に付けることができます。そしてその姿勢は数学以外のことにもきつと応用できることでしょう。

(文責 浅野直樹)

『物理』 高3年生 (金曜3限) 担当 上尾真道

冬学期から始まった高校生のための物理の授業です。現在、この授業に参加しているのは高校二年生の S 君のみですので、授業はもっぱら、S 君の学校での授業の進展を聞きながら、それに関するフォローを行っていくという仕方です。

今学期の単元は「波」でした。「波」は、まず通常の物質の運動とはまったく異なる性質を持つことを理解しなければなりません。物質の運動ですと、物そのものが移動するということになりますが、波の場合は、たとえ波面が進んでいるように見えても、物質はいつまでも移動していないということに気づくことが重要です。幸い、スポーツ観戦などで目にする「ウェーブ」(あるいはエグザイルという音楽グループが得意とする“ぐるぐるダンス”)が、説明の役に立ちました。それぞれの人間はまったく動いておらずに、ただその動きが、隣にいる人に伝わっているということが重要です。こうしてみると、波については、或る人(場所)がどのように動いているかということと、その動きがどのように伝わっているかということの、二つの視点をもつことが大事なのです。

波の本質を理解した後では、それを数学的(代数的)に理解しなければなりません。このときには、常に“概念”(例:波長、周期など)と、それを表す“記号”(例: λ , T など)、そしてその“単位”(例:m, sなど)とをきちんと区別して覚えることが何よりも重要です。また、常に“単位”を意識しておくことは、計算問題を行う際にも非常に役立ちます。

授業では、こうした物理の理屈について説明した後、学校で配布されている問題集や、こちらで用意している参考書の問題などで、理解度をチェックしつつ、フォローしています。

(文責 上尾真道)

『化学』 高3年生 (金曜4限) 担当 上尾真道

冬学期から開始した高校生のための化学の授業です。この授業には、高校二年生の S 君と大学受験を控える高校三年生の S さんが参加しています。

開始時、S 君は学校でちょうど有機化学の分野の学習が始まるころでした。有機化学の分野というのは、覚えることの多い分野で、それが大変ではありますが、一方、今までとはまったく雰囲気異なる分野なので、心機一転ひとつひとつ丁寧に学んでいくことによって、得意な分野にすることのできる場所でもあります。授業では主に参考書の解説を行い、それを踏まえて、自分でまとめを作成するという作業を中心に行っています。特に、有機化学に慣れていくために、まずはその構造式を自分でたくさん書いてみるように促しています。C₆H₁₂などと文字のみで書いてあるものを見ても、ちょっと澄ました感じで、いまひとつそれが何かははっきりしないものですが、C が四つ手を伸ばした形を書き、それらの手をひとつひとつ隣の C の手や H の手とつなげていく作業を行っていると、有機化合物にどことなく愛嬌めいたものまで感じてきます。いずれにせよ、覚えるほかないという分野ですから、どれだけ手を動かし、想像力を膨らませて、それぞれの有機化合物の特徴を捕らえていけるかということが重要となってくるわけです。

一方、大学受験を控える S さんには、自分で選んで持ってきてもらった課題をやってもらっています。大学受験に近いこともあり、センター試験や二次試験のための問題集が中心となりました。その後、自ら見直しをしてもらい、解法がわからないところなどについての解説を私が行います。よくあがった質問のうちには、質量や体積からモル数を導かなければならないタイプの問題に関するものがありました。モル数を導き出すことは、化学の問題ではよく出るものです。試験前ということもありますので、こうした点で不安を残すことのないように、解説を行いました。

授業では、このように、二人の生徒さんがそれぞれに自分の勉強を進めるということを基本として、適宜、私が指示や説明を加えるという方針をとっています。

(文責 上尾真道)

『古文講読』(水曜3限)

担当 前川 裕 ゆたか

『徒然草』を最初から読み進めてきた古文講読ですが、この冬学期で全て読み終えました。全てを読み通すことにより、兼好の文体の癖や思想の特徴などが実感として見えてきたように思います。またこの随筆が古来重要なものとして読まれて続けた、その流れに私たちも加わることができたのは喜びでもありました。ご参加いただいたお二人の受講生には感謝申し上げます。

さて次学期からは中古随筆の白眉、『枕草子』をとりあげる予定です。有名な章段以外からどのような世界が見えてくるのか、楽しみしながら読みたいと思います。テキストは岩波文庫版を用い、授業では適宜その他のテキストや注解書を参照しながら読み進めます。文法事項を確認し、背景などの内容について読み込んでいきます。どうぞご参加をお待ちしています。

『ラテン語初級文法』A (月曜4限)

担当 広川直幸

この授業では Hans H. Ørberg, *Lingua Latina I: Familia Romana* という、デンマークで出版された教科書を使ってラテン語を一から学んでいます。現在、全35課のうち、12課まで進みました。この変わった教科書に初めは戸惑っていた受講生の方々も大分要領が分かってきたようです。

この教科書は初めから終わりまで全てラテン語で書かれています。本文はもとより、文法の説明もラテン語。練習問題も全部ラテン語作文です。そんな本で勉強できるのかと訝る人もいるかもしれませんが、それができるのです。新しい語彙や文法は全て文脈の中で与えられ、自然と理解できるように計算されています。それでも理解が難しい場合には、きれいなイラストや直感的に分かりやすい説明が欄外に添えられていて、理解を助けてくれます。

あまりに演繹的な従来の教科書で挫折した人は、ぜひ Ørberg の教科書を手にとってみてください。良い教科書があっても一人で勉強するのは難しいと思う方はご連絡ください。

『ラテン語初級文法』B (火曜4限)

担当 山下大吾

『ラテン語初級文法』Bクラスでは、従来と同じく、一学期三ヶ月間で基礎的なラテン語文法をマスターするカリキュラムを組んでおります。教材として田中利光著『ラテン語初歩 改訂版』(岩波書店)を用い、必要に応じて他の文法書などから補足して進めています。各課に挙げられた文法事項を確認後、練習問題のラテン語を日本語に訳していただく流れになっております。和文羅訳問題は時間の関係上授業内では行わず、その日進んだ分の試訳をお渡しして、翌週以降ご質問をお受けしています。今学期の受講生はお二人で、その内お一人は植物名などの学名からラテン語に興味を持たれた由、ラテン語の間口の広さを再確認しつつ、毎週ゆっくり急ぎながら、楽しくかつ真剣に授業を行っております。

各課ごとに覚えるべき文法事項があり、進むにつれ文法表を確認する手間も煩雑になっていくことから、お二人ともに口を揃えて覚えるのが大変だと感想を述べられています。確かにその通りで、この始めの努力を怠ってしまうと、ラテン語は中々我々にその果実を与えようとしてくれません。しかし一度覚えてしまえば、一語一語ははっきりとその表情を見分けられるようになりますので、語順の妙も含め、安心して味読できるようになるはずです。今のところほとんど見慣れない、新しい形態が表で並んでいるため大変かもしれませんが、進むにつれ名詞や動詞の変化に一定の似た傾向が感じ取られるようになるはずですので、なるだけ早くその段階に達していただければ、またその流れを感得していただけるようなアドバイスが出来ればと思いつつ試行錯誤しております。

そんななかある日の授業で、「この *hostis* という語は敵という意味ですが、反対の意味ですけどホステスと何か関係があるのでしょうか」とのご質問をお受けしました。見かけ上意味が反転してしまった興味深い語源話はさておき、この現象について「ゲストは客だが、ホステスは主婦の敵というのは蛇足であろう」と

評された某先生の姿が懐かしく、かつありがたく思い起こされ、後日そのプリントをお渡しして責めを塞ぐこととなりました。その日の授業で次のオウィディウスの引用句を読むことになりましたが、やはり、あまりに出来すぎでしょうか。

Fas est et ab hoste doceri. 敵からも教わるべきである。(オウィディウス『変身物語』4.428)

(文責 山下大吾)

『ラテン語初級講読』 B (水曜 4限) 担当 前川 ^{ゆたか}裕

キケロー『友情について』を2名の参加者とともに読み進めています。一回10行程度について、朗読の上で訳していただいた後、文法事項の確認など詳細な説明を行っていきます。そのため10行程度で90分は十分かかっています。

初級においては、テキストを発音して読むことが大切だと思います。母音の長短やアクセントの規則などは、自分で読み上げることによって体に覚えさせるのが一番でしょう。辞書をまめに引いて発音を確認することは地味な作業ですが、ラテン語の性質を身につけるための近道ではないかと考えています。

次期も引き続き『友情について』を読み進めます。初級文法を学ばれた方であればどなたでも参加できます。次期は33節前後から読むことになるかと思いますが、詳細はお問い合わせください。

『ラテン語初級講読』 C (金曜 4限) 担当 前川 ^{ゆたか}裕

セネカ『ルキリウス宛書簡(倫理書簡)』を2名の参加者と読んでいます。1回15行程度と、初級講読Bよりはやや多めの量となっています。スタイルは同じですが、受講生のレベルに合わせてややスピードアップしている感じです。

セネカのテキストは時折例外はありますが、文そのものは比較的分かりやすいと思います。その意味で、初級の教材としては適切であると考えています。ストア派の考え方は現代にも通じる場所があり、二千年前と人間は変わっていないのかと嘆く一方、新たにテキストから学ばされることも沢山あります。また翻訳を参照していますが、日本語で読むのと原文で読むのでは雰囲気にもやはり違いがあります。その意味で、ラテン語で読むことには多に意義があるといえるでしょう。

次期も引き続き書簡を読んでいきます。ラテン語原文で読む楽しみに、どうぞ参加してみませんか。詳細についてはどうぞお気軽にお問い合わせください。

『ラテン語中級講読』 (金曜 4限) 担当 広川直幸

この授業ではウェルギリウスの『農耕詩』を読んでいきます。山下先生からこの授業を引き継いで、もうすぐ二年が経ちます。毎週20行程度の牛の歩みですが、継続は力なり。3巻の中程まで進みました。

音読に関してはあまり問題がなくなってきたので、最近レトリックの検討が中心になっています。ウェルギリウスはルーカーヌスのようにレトリックを濫用したりはしませんが、それでもレトリックの知識がないと何を言っているのかさっぱり分からない箇所がかなりあります。そのような箇所を解きほぐしてメカニズムを解明することに力を注いでいます。

授業で扱うレトリックは伝統的な *figura* に属するものばかりです。この *figura* はたいてい「文彩」と訳されます。文の彩り、つまり彩りを取り除くことができるものとして文が理解されているわけです。でも、本当にそうでしょうか。彩りであると見えていたものを除けてみたら、何も残らないかもしれません。「思想は文体である」という言葉もあります。*figura* を瑣末事として扱うのではなく、むしろ「型」と理解して、武道や芸能の型に通じる根本的なものと見るほうが適切ではなからうかと思っています。

このようなことを考えながら、牛の歩みは続きます。引き続き『農耕詩』を読み、その後は『アイネーイス』に進む予定です。

『ギリシア語入門』（火曜4限）

担当 広川直幸

この授業では昨年春から水谷智洋『古典ギリシア語初歩』を用いて古典ギリシア語を学んできました。豚インフルエンザの影響などもあり、途中何度か駄目かなと思ったこともありましたが、何とか脱落者を出さずに教科書を終えることができそうです。

来学期からこの授業はギリシア語講読の授業に昇格します。簡単なギリシア語作文を行いながら、プラトンの『ソクラテースの弁明』を読む予定です。テキストは J. J. Helm, *Plato: Apology* と North & Hillard, *Greek Prose Composition* の二冊です。古典ギリシア語の初歩を修めていれば参加可能です。興味のある方はご連絡ください。

ギリシア語入門の授業も新しい受講生を募っています。ゆっくりとしたペースで教科書を学び、一年後にはホメロス、プラトン、新約聖書などに直に取り組めるようになることを目指します。迷っている方は是非一度ご相談ください。できるだけ柔軟に対応いたします。

『ギリシア語講読』（火曜3限）

担当 広川直幸

この授業ではホメロスの『イーリアス』を読んでいます。秋学期で第1歌を読み終えたので、今学期は第2歌に進みました。A. R. Benner, *Selections from Homer's Iliad* を用いて、一回に30行程度のゆっくりとしたペースで進めています。

今学期は教科書や文法書を読んでもなかなか理解できない文法事項を重点的に解説するようにしました。一例を挙げれば、未完了過去（半過去）とアオリスト（単純過去）の関係がそれです。明らかに過去の一回的行為であるにもかかわらず、アオリストではなく、未完了過去によって表される行為があります。なぜそのようなことが起きるのかを一々の動詞について解説するよう心掛けました。われわれ日本語人にとって古典ギリシア語の基本的文法カテゴリーを理解するのはなかなか大変なことなのですが、それを投げ出してしまっただけでは原典で読む意味などなくなってしまいますので、じっくり感覚を養っていこうというのがこの授業の方針です。

この授業は来学期から金曜3限に移ります。受講者の希望もあり、しばらくの間『イーリアス』を読み続ける予定です。

第18回 ラテン語のゆうべ

とき 3月19日(金)

午後6:30~8:00(参加無料)

講師 広川直幸(山の学校ラテン語講師)

場所 北白川幼稚園・第3園舎

演題 『ラテン語とイタリア語』

対象 ラテン語に関心のある方

~お知らせ~ “4月のイベント” (予定)

- | | | |
|-----------------------|---------------|----------------|
| ・4月12日(月) 18:30~21:30 | 「なんでも勉強相談会」 | (中学・高校生) |
| ・4月17日(土) 10:00~11:30 | 「山びこクラブ」 | (小学生) |
| ・4月17日(土) 10:00~11:30 | 「家庭学習に関するQ&A」 | (幼稚園・山の学校の保護者) |
| ・4月19日(月) 16:00~18:00 | 「将棋道場」 | (小学生以上) |
| ・4月26日(月) 16:00~17:00 | 「ひねもす道場」 | (小学生以上) |

※4月以降、イベントの案内はニュースレターの形でお知らせします。クラス便りは日々ブログにて更新中です。

学校法人北白川学園 北白川幼稚園・山の学校 〒606-8273 京都市左京区北白川山ノ元町41
電話 781-3215 FAX 781-6073 (山の学校・幼稚園共通) 電子メール taro@kitashirakawa.jp
ホームページ <http://www.kitashirakawa.jp/yama.html> ウェブログ <http://www.kitashirakawa.jp/yama/>